

490. 49-Ma61ウ

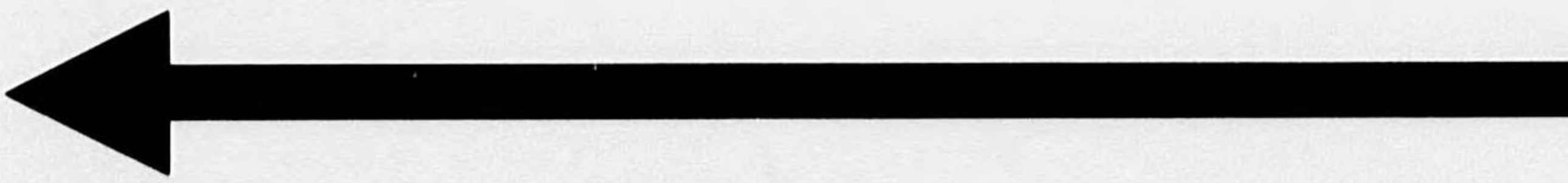


1200500743784

490.49
61



始



外460

五

490.49
MA61

白餘簿療診 第二



正木不如此

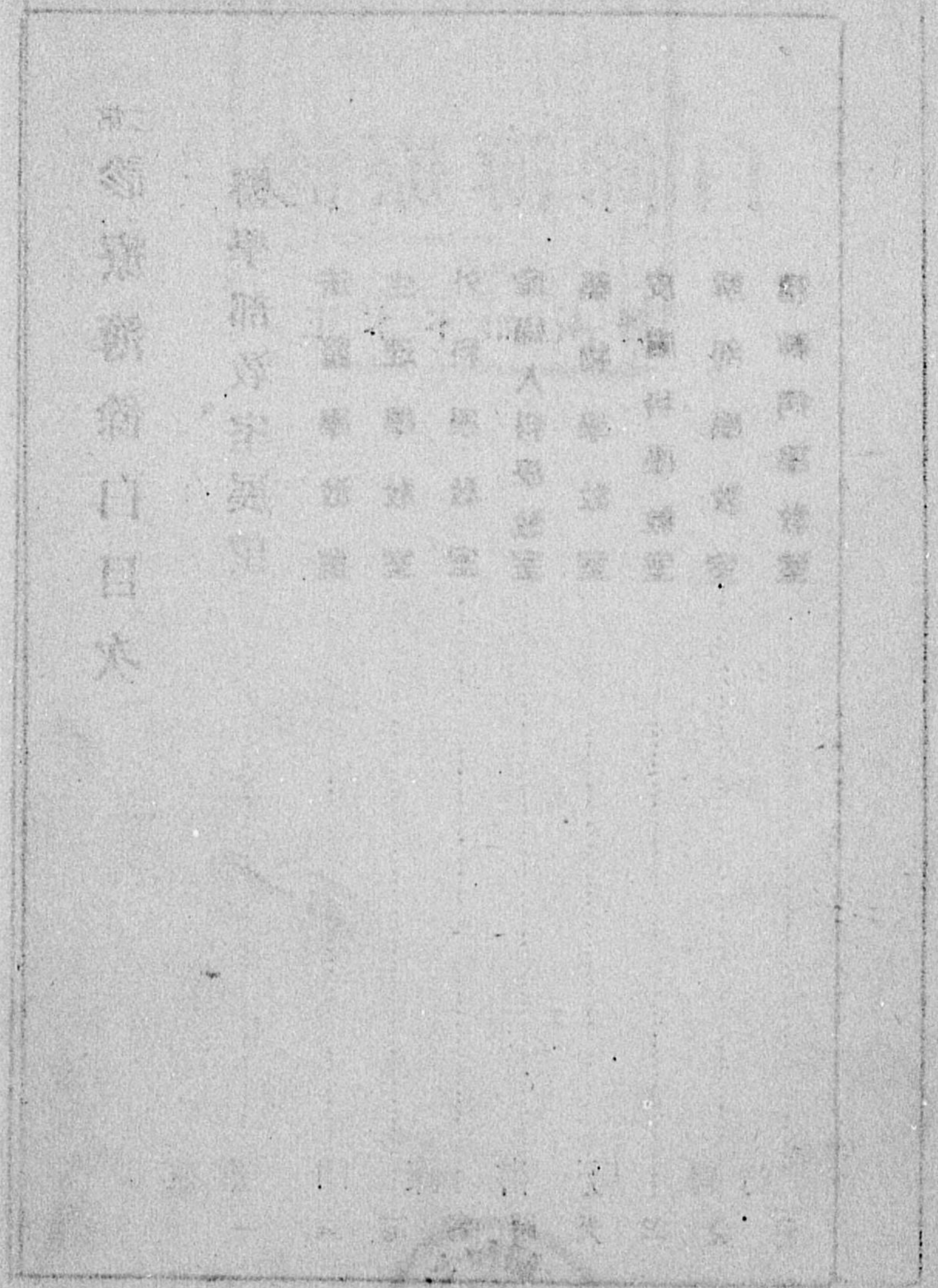
行刊 房書條四京東



~~517127~~

第二 診療簿餘白目次

| | |
|---------|----|
| 醫學部教室展望 | 一 |
| 法醫學教室 | 三 |
| 生理學教室 | 一七 |
| 外科學教室 | 三〇 |
| 產婦人科學教室 | 四 |
| 藥物學教室 | 六 |
| 皮膚科學教室 | 七 |
| 解剖學教室 | 全 |
| 精神病學教室 | 一〇 |



人 鯛 蛙 猿 鳩 猫 牛 馬 犬 犬 兔 兔

間

.....

四二五 四〇〇 三六六 三七二 三七七 三三三 三三八 三三四 三〇一 二八八 二七四 二六〇

21/5/2

實驗動物列傳

| | | | |
|----------|-----|-------|-----|
| 兔 | (一) | | 二四六 |
| モルモット | (三) | | 三三一 |
| モルモット | (二) | | 三二七 |
| モルモット | (一) | | 三〇四 |
| 實驗動物列傳 | | | 二〇三 |
| 物理科學教室 | | | 一八六 |
| 醫化學教室 | | | 一七三 |
| 內科學教室 | | | 二五八 |
| 耳鼻咽喉科學教室 | | | 一四四 |
| 眼科學教室 | | | 二二九 |
| 小兒科學教室 | | | 二一五 |

醫學部教室展望

醫學部教室展望

醫學部教室展望

醫學部教室展望

醫學博士濫造の聲が高い今、大學醫學部の各研究室では、論文製作者が血みどろになつて、論文のテーマ探しと完成とに、精進して居るのだ。それは決してあだやおろかの努力ではない。その一本調子の努力裡から生れるナンセンスとユーモアは、泣き笑ひのシヤズだ。此シヤズこそ千九百三十二年の工場地帯の騒音ではあるまいか。

法學教室

劍道師範が得たりかししとスツパリと一太刀やつてしまつたと云ふのである。

「物騒な法律だと思つてたよ。」

法學教室の若い學者達がドンブリ飯を食ひながら、其日の新聞を讀んでるのだ。

「生命がおびやかされた時には、こつちから先にやつてしまつて差支ない、と云ふんだから、生命が果しておびやかされたかどうかを決定しなくちやならない。その決定を裁判官が常識的にやるんだらば、いつはどうも……」

とエロ専門の花森醫學士が、うなだんの飯ばかり食つてしまつて、うなぎの残りに番茶をドブンとかけた。

「花森、貴様エロは及第したんだらう。此度はグロに鞍代へしたらどうだ。」

花森は今迄此教室のエロ方面を代表した様な研究をして居た。處女の醫學的證明とか、バスコントロール術の失敗統計など、云ふのを最近發表して名聲噴々だつたのだ。

「春が来るからグロも實驗例が増加するだらうとは考へては居る。」
 で、劍道師範の方はかうなのだ。警視廳にその人ありと知られて居る山上劍士が高利貸から高利を借りて豫定通り返さないのだ。で中野の奥の破ら家へ早朝に催促に行つたのが高利貸の爺なのだ。

「お早う。」

と庭へ廻ると、雨戸からズブリと五尺光つて出たのだ。抜けた腰を拾つて高利貸は逃げて歸つた。

「返すものが手許にないので、腰のものを渡すつもりでした。」

と劍士は辯明して居る。

「毎朝ですよ凡十日程。」

劍士すまして云つて居る。

「借りの金は三圓、利子三ヶ月で三十圓。ペラ棒だが返すつもりになつて腰のものをなげ出した。」

投げ出したが、刀身だけが雨戸からズブリと出て、カチリ、つばでつかへて居るのだ。

「刀でなく三十三兩。」

高利貸は十日目に庭でどなつた。

「安くふんでも三百兩のものだ。二百七十兩釣錢を置いてけ。」

と雨戸の中で聲がした。

「十一日目には骨董屋をつれて來たらしい。」

劍士が檢事に答へて居る。

「其晩酒によつて寝て居ると、カサと床の間で音がした、覆面の盜賊が刀かけの村正に手をかけようとして居る。それを渡してはこちらがやられるは必然……わしの財産は命しかないのは盜賊も知つてゐる筈、スツと床をぬけて、刀掛からとるやズブリとやりました。」

高利貸がやられたのだ。

「勿論こいつは切捨御免法でもまぬがれないだらう。」

法醫學者の一人の意見だ。

「さう單純には論斷出来ないぞ。劍士がその場合實際自分がやられると信じて、こつちから先にやつてしまつたのなら、無罪だ。」

「でも君前からの事情を考へなくちやいけないぜ。刀を金の代りに渡すと劍士はその前日の朝、庭先の高利貸に云つたのだ。つばでつかへて刀身だけ雨戸から出て居るのでは、取りたくても取れないから、劍士が泥酔して夜中に受取りに高利貸が行つたのだらう。だから、形式は盗賊らしいが、實は財物辨濟をうけに行つたのだ、其證據には劍士の枕頭に釣鐘百七十兩置いてあつたのだ。骨董屋は二百兩と踏んだのだから。」

「それは事件と直接關係はない、問題はその夜中に劍士が生命の危険を感じたかどうかだけにある。」

「僕は劍士はその場合生命の危険は感じなかつたと思ふ。苟くも劍士だ。そんな卑怯な……」

「いや劍士だから眠つてる間にも隙がない。それが劍道の極意だよ。」

若い學者の議論を黙つてきいてた教授が、花森に云つた。

「君は劍士が生命の危険を感じたと主張するのだね。」

「え、さうです。」

「では其證據は？」

「證據？……その證據として劍士はスバリとやつたのです。」

「ふん、つまり、股がかゆかつた、だから此蛋だと思つて、ふんどしの蛋をひねりつぶした……ところが毛じらみが居たらどうする。」

「蛋をすりつぶして人血を彼が吸つて居たかどうかを検べます。」

「其所だよ。つまり生命の危険を劍士が感じたかどうかを、科學的に……出来るならば法醫學的に證明する方法を研究するのが、君の今日からの研究課目だ。人類は生命の危険を感じれば、どう云ふ生理的變化を起すか、と云ふ研究だ！」

花森の新研究が初まつたのだ。

X

X

X

犬を庭の垣の中で飼つて居る。花森が牛肉を呉れて居る。すつかり慣れて來た。時々犬を小使におさへさして、脚の靜脈から血液をとる。その血液からアドレナリンを檢定

するのが、花森の日課だ。

一體人類でも動物でも、筋肉運動の材料になるのは血液中にある葡萄糖だ。此葡萄糖が筋肉で燃える時に筋肉が働くのだ。血液中の葡萄糖は平常は大體一定した分量を含んで居る。

犬をつかまへて血液をとる、その血液の中にはいつも凡一定量の葡萄糖が含まれて居る。此血液の中の葡萄糖は、肝臓にあるグリコーゲンから出来て血液に入つて来る。グリコーゲンが葡萄糖になるのは、血中にあるアドレナリンの力なのだ。血液の中のアドレナリンが増加すれば、自然血液中の葡萄糖が増加して来る。

マラソン選手が駆けて居る間は血中のアドレナリンが増加して居る、従つて葡萄糖も増加して筋肉が働けるのだ。

花森は小使に犬をつかまへさせて、犬の脚から血をとつた。

「ウー」

とうなり聲と共に赤毛布をかぶつて、狼の頭の形の籠をかぶつたものが、小使のおさへて居る犬に近づいた。

「キャン、キャン、キャン！」

犬は甚だしく不安の表情で逃げかゝつた。小使が一心に犬をおさへて居る。花森が犬の脚から第二回目の血をとつた。

「放してやれ！」

小使が手をはなすと犬は夢中になつて逃げ廻つた。狼になつた茶目の小使が犬を追ひかける。犬はキャン／＼云つて逃げ廻る。春だ。大學の庭に梅が散つて居る。

狼が犬を追ひつめて、犬小屋の隅でふる／＼ふるへて、今にも食はれる我身の宿命におびえながら、あきらめて居る。其處で又犬は花森から血をとられた。

借花森は研究室に入つて、此哀れむべき犬の血からアドレナリンの定量分析をやつてるのだ。

犬は危険に遭遇すると常時の血中アドレナリンの二〇乃至五〇パーセントが増加するのだ。動物は一般に生命の危険があれば、精神的に不安になる。逃げるか又は背水の陣をはるしかない。どちらにしても、筋肉の運動が必要だ。だから精神的に不安になると交感神経と云ふ神経

が興奮してその興奮が副腎を刺戟して、アドレナリンが血中に餘計に出て来る。そのアドレナリンが肝臓を刺戟して血中に葡萄糖を増す譯になるのだ。交感神経が興奮すると、顔面や全身の皮膚血管が一時収縮するので蒼白となり、手足がふるへて来る。

「犬ではアドレナリンを血中から定量分析すれば、彼の感ずる不安の程度を科學的に知る事が確に出来る……。」

花森は得意だった。

「今日あたりは、グレタ・ガルボが来ないかなア。」

「昨日は病理へ来たさうだ。」

「来ないかなア。」

ドンブリ飯の午食の食堂た。

「醫界ニツボン」と云ふ週刊新聞で最近雇ひ込んだすばらしい女記者だ。醫界のゴシップや各教室の研究題目などの探訪にやつて来る記者だ。本名は何と云ふのか、誰も知らない。誰が名付け親なのか、いつの間にかグレタ・ガルボと云はれて通つて居る。

若い醫者達の集まりだ。云ひ寄りたいた野心を持つて居る連中ばかりだが、かう共有的になつては誰も手が出ない。然も教授室迄、グン／＼と木戸御免で入つて行くので、何處の研究室も彼女に手を出して教授にでも話されてはと、残念ながらあきらめて居ながら「今日あたりは来ないかなア」と心待ちに待たれる名花一輪だ。内科あたりでは看護婦が大分焼き出したと云ふ噂だ。

スツとドアがあいた。グレタ・ガルボだ。

「よう、スラッしや。」

今日は眞赤なワンピースに鶯色のバンドだ。靴は鶯と赤のジャズだ。

「今噂をしてたよ。」

「さう、光榮だわ。御土産を持って来ましたよ。」

スチートポテトだ。お茶を入れるもの、椅子を出してやるもの大持てだ。

「その代り何か種を下さいな。」

「あゝやるとも。どうだ諸君、御馳走にならう。」

蟻が砂糖にたかつた。

「先生、昨日の解剖はどうでしたの。」

「うん、あれか。強姦の形跡歴然だよ。」

「そして處女ですか。」

「處女？ 強姦されたる處女か。」

「いやな先生、あげ足をとつて……では失言を取消します。處女が強姦されて非處女になつたのでしたか。」

「然り、由來然り！」

「又……」

花森が立つてグレタ・ガルボに耳打ちした。

「え。」

艶然として彼女は花森とつれ立つて食堂を出た。一同舌打をして、スイートポテトを食つた。

花森はガランとした小さな室へ彼女を誘ひ入れた。

「いゝ種があるんだ。今話すんだが、一寸君にたのみがある。」

「なアに。」

「血を一滴。」

「血？」

「あゝ、處女の血。」

「あらッ先生、あの御研究はもうすんだのでせう。」

「あゝ、あれはすんだのだ。」

「そんなら……」

グレタ・ガルボ逃げ腰なのだ。

「一滴だから。」

「だつて。」

「一滴だけ。」

「では私白状するわ、私處女ぢやなくつてよ。」

「おや、途方もない事をきいちやつたな。では失言を取消さう。では非處女の血を一滴。」

「え、あげますわ。けれど誰にも話してはいや！」

「よし、黙つてる。命にかけて。」

彼女がうでをまくつた。

「耳からでいゝのだ。」

「さう。」

花森がグレタ・ガルボの耳たばに一寸メスを入れて、ふくれ出す血をピンセットでつまんだ。吸取紙の小片で吸はせた。その紙片を瓶の中に落した花森は、ニユツと笑つてソソクサとドアに近づいた。

「カチン」と鍵をかけた音だ。女が花森を見た。花森はドアから鍵をぬいて白衣のポケットに入れた。それを女は氣づいた。

「おー」

花森はソロ／＼と女に近よつた。女はスツと椅子を立つた。

「おい！ 静かにしろ。」

「……」

不安な目で女は立つた。花森はジリ／＼と女に一步々々近づく。

「何をなさるのです。」

「きまつてる。」

花森が女の右から近づく、女は一步々々左へ動く。二歩三歩、女の足が其處にあるソファにふれた。その時花森は一舉に彼女にとびついた。花森の手が彼女の口に向つた。彼女が逃げ損じてソファに打伏せに倒れた。その上に花森はかさなつた。

「あッー」

と女が聲を立てた時、花森は女に折り重なりながら、女を押へつけた。そして花森は何をしたか！

女の耳から血を吸取紙で吸ひとつてるのだ。小片が眞紅になると花森は無器用に起き上つて

その紙片を新しい瓶に入れた。

「や、失敬した。」

聲をきいて女はスツと立ち上った。

「何です、失禮な！」

花森はデラ／＼笑つてポケットから鍵を投げた。その鍵を床に見た彼女はチラと笑つてそれを拾つた。

女はドアに進んで鍵を穴にさしてドアをあけた。そして花森を見た。

「ふー、度胸なしの先生！」

聲と共にグレタ・ガルボの姿がドアから消えた。花森は呆然として立つて居た。

五分後花森は、血を吸つた吸取紙の入つた二つの瓶を持つて化学室へ行つた。五時間程彼は熱心に分析をやつて居た。

分析の結果は？

第一の血液、第二の血液。アドレナリン含量は殆んど差違がないのだ。

……貞操の危険……生命の危険……と血中のアドレナリン……花森は暮れ行く春の窓外を見て考へた居た。その時ふと耳にひどく聲があつた。

度胸なしの先生！

あゝ、さうか。実験材料が悪かつたか。……今度はいつ来る！ グレタ・ガルボ！

生理學教室

小林醫學士が犬をいちめ出した。條件反射の研究だ。ロシアのバプロンが面白い研究をした。その研究の復試をやらうと云ふのである。

野良犬よ、又頸に鑑札をつけ忘れた飼犬よ。氣をつけ給へ。狂犬病は流行して居なくても犬狩りの鑑札も持たぬルンペンが市中を歩き廻つてるよ。

犬一匹を醫科大學に出入りの動物屋に引つ張つて行けば三圓になるのだ。此不景氣に一日市中をあるき廻つて、頸に鑑札のない犬を捜せば三匹や四匹にはぶつかる。牛肉を投げられてう

つかり御馳走になつてると、もう君達の足はわなにかゝつて居るのだ。そして君達は犬屋へ賣られるのだ。

もつともボカリとやられるのではないが、一二日中に野良犬は此生理學教室へ賣られるのだ。一週間は飯も肉も教室の小使さんが、時間をたがへず呉れるだらう。空腹の尾を垂れて町中をめぐり歩いた日の事を思へば、寄らば大樹の蔭、寄食するならば醫科大學と思ふだらう。

だが一週間過ぎると君等は小林先生のために手術臺にのせられるのだ。四つの足をしばりつけられて、腹を上にして身動きもなくなされて君等がキャン／＼と叫ぶ時、君等の鼻の尖にはマスクがかけられて、ブーンと強い香がするだらう。エーテルなのだ。人道を重んずる小林先生は、君等を無麻酔で手術する様な亂暴はしない。

諸君がエーテル麻酔からさめた時、諸君は頸のあたりと腹の一部が痛くてたまらないだらう。痛い所があれば前足をのばして撫で、見るか、舌でペロ／＼なめるのが、諸君の本能だがその本能も満足出来ない様に、頸と腹とは人間並に繃帯がかゝつて居る。諸君は一日一晩キャン／＼犬小屋で泣き叫ぶのだ。

二日目の夕方になると教室の小使さんが来る。そして諸君をやつとからだが入れるだけの小さな箱に入れるだらう。諸君は手術後水一滴も飲ませられなかつたのだから、のどが乾いてたまらないのだ。

小使さんは諸君の腹の繃帯を少しづらせる。其處からガラス管が出て来る。そのガラス箱に小使さんはゴムの管をはめる。そしてそのガラス管の一方の端にはガラス製の漏斗がはめられる。其處で諸君ののどはグビ／＼する筈だ。牛乳瓶を小使さんが持つてるからだ。諸君は鼻をピク／＼させて、舌なめづりをする。だが遺憾千萬にも諸君の渴望の牛乳は諸君の口には入らないのだ。

小使さんは牛乳の瓶の口をあけて、白い乳をトコ／＼とゴム管の端の漏斗の中につぐのだ。その漏斗を小使さんが高く持ち上げる。牛乳は漏斗からゴム管の中に消えてしまふ。それと同時に諸君は幾分腹の虫が収まった様に感じはしないか。その筈だ、牛乳はゴゴ管を通つて諸君の胃の中に入つて行くのだ。諸君はエーテルで麻酔して居る間に、腹の皮をきられて胃に穴をあけられたのだ。その胃の穴の中から腹の皮迄ガラス管が通つて居るのだ。

此人工的に造られた胃の穴から諸君は物を食べさせられるのだ。恐らく死ぬ迄かも知れない。毎日その胃の穴から諸君は牛乳をのまされるのだ。食ひたくても食ひたくなくても、小使さんは規則正しく一日に五合は胃の中につき込んで呉れるのだ。

一週間も過ぎると諸君は手術の疲労からすっかり恢復するだらう。その頃になつて、諸君は小林先生の研究室へつれ出される。その頃は諸君の頸の繃帯もなくなつて居る。

諸君は何をするか。諸君、心配し給ふな、小林先生は血の中に牛乳を入れて諸君の前に出す。諸君はそれに舌をのばしてべちゃ〜やるだらう。しばらくぶりの美味だ。が、諸君が乳の甘きに陶醉して口からのどへとのみ下した牛乳は一體どうなるのか。諸君は気がつくまいが、諸君の頸と胴との間には生れもつかぬ一つの穴があいて居るのだ。その穴から牛乳はみんな外に出てしまつて居る。諸君の食道は途中で切断されて、胃へ續かずに頸のつけ根の皮膚にぬひつけられて、折角口から飲んだ牛乳は、みんなそこから出てしまふ様になつて居るのだ。

それだけでない。諸君の耳の下にある耳下腺と云ふ唾液腺は元來口の中に唾液を注ぐ様にな

つて居たのに、その唾液腺の出口は、諸君の頬べたに移轉して居る。だから諸君が牛乳を夢中になつてペロ〜やつて居た時、頬べたからつばきがだら〜流れて居たのだ。

「しめた！手術は大成功だ。」

小林先生は大喜びで、諸君に第六號と云つた様な番號札を足にしつかりと結びつけるだらう。これで諸君は完全な實驗動物たる資格を得たのだ。

春の午後た。早慶戦には早く出かけなければ席がない。小林學士は第六號を小使に持つて來させた。

チリ〜と呼鈴がなつた。と小林學士は第六號の前に牛肉を投げた。第六號はその肉にとびついてクシヤ〜と噛んでは飲み下した。勿論のみ下した肉は頸の下の穴からみんな出てしまつた。

「第二號と四號を持つて來てくれ。」

小使が第六號を連れて行つて、二號と四號を連れて來た。御多分に洩れず、これも又完全な

前處置をした犬なのだ。

「チリ／＼と呼鈴を小林學士はならして、牛肉を投げた。犬はそれを食つて顎の穴から出した。」

「今日はこれでやめるよ。早慶戦へ行くんだ。」

小林學士はソワソワして帽子をかぶつた。

小使は犬をつれて出て行つた。其處でドアがコツ／＼と打たれた。

「はい。」

小林學士が答へた。スツとドアをあけて入つて來たのはおなじみのグレタ・ガルボだ。醫事新聞の女記者だ。

「あら、おでかけ。」

グレタ・ガルボは春のワンピースで艶に笑ひかけた。

「え、早慶第一回戦だから。」

「まア、入場券は？」

「今日のは手に入らなかつたから、外科にたのんで救護班になつて行くつもりさ」

「さう、私ネット裏を二枚持つてゐます、何んなら一枚……」

「そいつは有難いな。」

小林學士が二三歩進んだ。グレタ・ガルボがハンドバックから入場券を出した。

「私随分苦心して手に入れましたのよ。先生にならあげますわ。」

小林學士でなくつてもこれは感謝する。

「ありがとうございます。」

グレタ・ガルボが一寸茶目らしく右手をのばした。小林學士がその手を握つた。案外強く握り返されて、小林學士は一寸頬を染めた。

「ではお供させて戴きます。」

二人は教室を出て、春日の校庭を歩いた。

「先生今の御研究は？」

「条件反射です。或る一定の条件の下に、一定の反射が起る。其研究です。僕は犬ですがね」

パプロフがやつた復試です。犬に牛肉を與へる。その時に相圖として呼鈴をならす。それを度
度くり返すと、犬は呼鈴さへならせば肉を與へなくても唾液を出す様になる。それなのです。」

「面白い事ですね。早慶戦ときくと、それだけでエキサイトする、と云つた様な……」

「そいつは一寸ちがつて居るがまア大體さうですね。」

「呼鈴をならして肉をおやりになるのは毎日ののですか。」

「え、毎日です。午後の一時頃五匹程の犬にそれをやつてるのです。」

「ではしばらく毎日その頃教室へあがつてその實驗を見せていたらいよいよございますか。」

「え、いゝですとも。その代りリーグ戦のある間毎日ネット裏を心配してくれませんか。」

「O・K!」

二人は明治神宮外苑に入つて行つた。

X

X

X

午後一時、毎日グレタ・ガルボが小林學士の研究室へ来る。三匹の犬はあらかじめ研究室へ
来て居た。小使は犬に氣をきかせた譯でなく、グレタ・ガルボに氣をきかせて、いつも席をは

づして居た。グレタ・ガルボがドアを打つ。それを合圖に小林學士は呼鈴をならして肉を投
けた。肉を食ふ犬は頬べたの穴から唾液をたらした。

「そうれ、唾液腺が働くので唾液が此穴から出て来るでせう。今は肉を味つた味覺の刺戟で
唾液の分泌が高まるのです。今に呼鈴だけで唾液を出す様になりますよ。」

「でも何ですか惨酷ですわね。折角食べた肉をみんな出してしまつては。」

「だが胃迄肉が入ると、胃からの刺戟で唾液が出ると云ふ條件も合併しますから。一體なら
肉を見ると云ふ刺戟さへなくして、置く方がいゝんです。」

「つまり盲ならば。」

「さうだ。こいつらの目をつぶしてやるかな。」

「そんなく惨酷な事……先生の様な方でも御研究になると随分惨酷な事をなさるん
です。私何ですかお醫者さんは恐ろしくなりましたわ。その調子で誰に對しても……」

「いや、あなたに對しては大丈夫ですよ。」

「さうでせうか知ら。私商賣上仕方なくてかうしてあちこち研究室を廻つて居ますが、ど

の教室でも随分慘酷な事をなさつてますわ。」

「それは學問のためですよ。……あ、今日はリーグ戦は何處と何處でしたっけ。」

「今日(けふ)はつまりませんわ、帝大と立教ですから。」

「ぢやア今日は願ひ下げにしますかな。」

「さうですね。では私(わたし)一寸解剖(かいぶつ)へ行つて來ますわ。四時頃(じごころ)又上りますから……先生(せんせい)邦樂座(はうがくざ)へ

いらつしやいませんか？ 今週(こんしゅう)はいゝんですよ。」

「O.K. では又。」

グレタ・ガルボが出て行つた。

小林學士(こばやしがくし)は小使(こつひ)を呼んだ。

「二號(ごう)と四號(ごう)をつれて來てくれ。」

條件反射(てんけんはんしゃ)の検査(けんさ)をしたくなつたのだ。小使(こつひ)が二號(ごう)と四號(ごう)を持つて來た。

「四號(ごう)は一寸隣(とな)の室(むろ)においてくれ。」

小林學士(こばやしがくし)は二號(ごう)を小さな箱(はこ)におし込んだ。

犬(いぬ)は頭(あたま)を箱(はこ)から出して居るが、腹(はら)はしつかりせまい箱(はこ)におしつけられて動きもとれなかつた。此(この)犬(いぬ)と四號(ごう)はもう一ヶ月(げつ)近く、呼鈴(よびかね)をならしては肉(にく)を食(く)はされて居るのだ。

學士(がくし)は犬(いぬ)の唾液腺(だえきせんとん)の頬(ほ)べたの穴(あな)に細(こ)い鐵製(てつせい)の管(くだ)をさし込んで、その管(くだ)の下(した)にメートルグラスを置いた。ヂリ／＼とベルが鳴(な)らされた。美事(みこと)に頬(ほ)べたに入れられた管(くだ)から唾液(だえき)が出て來た。

「しめたぞ。」

小林學士(こばやしがくし)は獨語(ひとりごと)して、メートルグラスにたまつた唾液(だえき)の量(りやう)をノートに書(か)きつけた。一時間(じじかん)程(ほど)學士(がくし)は、机(つくえ)によつて何か書(か)いて居た。再び學士(がくし)はベルをならして、今度(こんど)は肉(にく)を犬(いぬ)の口(くち)に入れて。唾液(だえき)が又(また)出て來た。前(まえ)の唾液(だえき)と量(りやう)に於(お)いては殆(ほと)んど變(かは)らなかつた。學士(がくし)は前(まえ)の唾液(だえき)と今度(こんど)の唾液(だえき)とを別(べつ)の瓶(びん)に入れて、その上(うへ)にトルオルを入れた。化學的(くわがくてき)の分析(ぶんし)をするために貯藏(ちよさう)して置くのだ。

學士(がくし)は自分で第二號(ごう)を動物小屋(どうぶつこや)へ持つて行つて、隣(とな)の室(むろ)から第四號(ごう)をつれて來て、又箱(はこ)の中(なか)へ入れた。唾液(だえき)の流出口(りゅうしゅつぐち)に管(くだ)をさした。そして注意(ちゆうい)しながら呼鈴(よびかね)をならした。

「おや……」

唾液は一滴も出ないのだ。學士はしばらく見つめて居た。矢張り一滴も出ない。學士はノートをあけた。

「第四號。」

と獨語しながらノートをのぞき込んだ。第二號と全く同様な前處置がしてある犬なのは確であつた。學士は犬の足を見た。第四號と札がついて居る。ノートにある毛色の通り純白な毛並の揃つた美犬だつた。

「をかしいな。」

も一度ベルをならして見た。矢張り一滴も唾液は出ない。

學士は犬とノートを交互に見た。ノートを投げて腕を組んで考へ出した。

……同日に手術した犬だ、どちらも同じ雄だ。その後一ヶ月第二號と同様に毎日呼鈴の合圖で肉を興へて來たのだ。第二號は既に呼鈴だけで唾液分泌反射が起る。だのに四號は起らない。

學士はやけになつて呼鈴を續けさまにならした。小使が飛んで來た。

「お呼びですか。」

學士は呆然として小使を見た。

「呼びはしないよ。第二號はベルの音だけで唾液を出したんだ。だのにこいつは一寸も出ないからやけになつて、呼鈴をならしたのさ。矢張り唾液は一滴も出やがらない。」

小使は無表情で小林學士を見返した。

「先生そいつはつんぼぢやありませんか。」

「う……」

學士は狼狽して第四號の耳をひつばつた。兩方の耳をひつばつた。

「あ、いけねえ、耳だれだ。おい耳鼻科へ電話をかけて山田先生が居るかきいてくれ。」

小使はすつとんで行つた。入れちがひにグレタ・ガルボが入つて來た。

「あらッ、まア可哀さうに、私の大好きなベスを……」

女が犬にかけよつた。その時學士は狼狽してメートルグラスを唾液管にあてなくてはならなかつた。瀧の如く唾液が流れ出したのだ。

「可哀さうなベス。お前も頬に穴をあけられて居たの。私が毎日あなたにあけた肉も、頸から出ちやつて居たの。」

グレタ・ガルボが第四號の頭をなでた。學士がうなる様に云つた。

「さうか。見るといふ事も矢張り重要な條件だな、特につんぼなら……」

外科學教室

一

今大手術が終つた所だ。スポーツ狂時代、野球狂時代だ。特に狂人發生の春のシーズンだ。からと云つて薄いパンツの、苟くも學習院女學部の姫御前が、神宮外苑の外野側の樹の上から慶應寺竹のピンチを救ふ三疊打にボーツとしてしまつて、上の被から下の枝へのスカートのバラシウトの効果零パーセントの顛落で、したゝか股をさいたのだ。

教授は刀を捨て、長い廊下を浴場へ。後始末をつけて助手の若い先生達も、浴場から出て

すつばだかの白衣、毛だらけのからすねを出して、醫局へ歸つて来て、スルメにビールの満ちたのだ。

「あれぢやア、命はとりとめても、女はとりとめられつこないぜ。」

「涙潸然！」

と額から汗を流して、今の手術の後物語だ。

「おい、グレタ・ガルボはどうした。」

入つて来たチャールス・ロジャースがニコ／＼笑つた。

「うん、もういゝ様だ。一體どうしてあいつが手術室へ入つて居たのだ。」

外科きつての好男子の本姓武本が不服八分でビールのコップに手をかけた。

「どうしてつたつて、俺達が知つてるものか。俺達は先生と一緒にネット裏で救護班に居たのだ。その時、あの女は隣の席に居たのは確かだ。」

「ぢやア、あの怪我人と一緒に君等のあとをついて病院へ来たのだな。」

「おい、チャールスーしらばくれるなよ。貴様だぞ、貴様より外にあいつを手術室へ入

れてやるものがあるものか。」

「馬鹿な事云ふな。おらア何にも知らねえ。」

「と云つても、グレタ・ガルボ、が手術室で倒れた時、すぐに後から抱きとめてつれ出したのは、チャールス・ロジャース、お前ぢやないか。そして俺達が女性の復興に骨を折つてる間、病室で、グレタに赤酒を飲ませたり、キツスをしてやつたり……」

「よせよ、くだらん。」

「知つてるぞ。此頃は貴様馬鹿に朝早く来るぢやないか。六時つて云へば研究室に居るさうぢやないか。知つてるぞ。グレタ・ガルボもその頃になると研究室に居るつて事だ。俺達こそいゝ面の皮さ。吉祥寺あたりのベッドから二人別々に驛で下りるつてのは本當だらう。」

「勝手にしろ、たんとやけ。グレタ・ガルボとチャールス・ロジャースがどの映畫に一緒に出て来る？」

「外科手術室にて、とでも云ふ映畫だらうよ。」

教授が歸り仕度をして入つて來た。

「武本君。どうした、あの女記者は。」

助手達が立上つて教授を見つめた。

「落着きました。」

「腦貧血だらうな。あの女記者、實に圖々しいから、こらしめのために、手術室へ入れてやつたのさ、度胸のない奴だ。まア大事にしてやり給へ。」

教授が出て行つた。チャールス・ロジャース元氣恢復だ。

「見ろ、先生が入れたんぢやないか。」

「さうらしいな、大いに失敬した。……だが先生も茶目だな。」

「さア茶目だか、助だか。……おやもうビールはないのか。」

越後屋の小僧がビールの箱を持ち込んだ。

「こんにちは。今日手術をなさつた大小路さんからです。」

「しめたー 越後屋そいつをあけてけ！」

「くさ。」

小僧がカチャ／＼と釘をぬき始めた。

「武本、貴様壽司でも出せ。グレタ・ガルボの肌を見た罰金だ！」

「先生達、壽司なら今來ますぜ。花屋の小僧さんが持つて來たんです。病院の門で自動車と衝突してお皿ごとひっくり返したので、今造りなほしに行つてゐるんです。……へい、あきました。」

小僧が箱から出したビールをテーブルの上に林立させた。

「越後屋！ 歸りに花屋へ寄つて壽司が五圓だつたら三圓にして二圓は鐘詰に代へる様に話してくれ。」

「〈S。〉」

二

稍青ざめたグレタ・ガルボが、夜になつてまだ飲みつゞけた居る醫局へ入つて來た。

「よう、グレタ・ガルボ！ ウエルカム。」

酔つ拂つた醫者がコップをつきつけた。

女はコップをうけとりながら武本に云つた。

「先生、先程は有難うございました。おかげ様でもうすつかり……」

チャールス・ロジャースすつかり照れた。

「よう。二人並べよ。」

酔拂ひが女の腰を押して武本と並べて腰かけさせた。

「さア、外科手術室にての第一巻の終りの場面だ、諸君、グレタ・ガルボとチャールス・ロ

ジャースのために乾杯！」

一同立ち上つた。二人は下を向いてゐる。

「武本立て、お客一同の乾杯に新郎新婦が立ち上らないと云ふ法があるか。」

女が頬を染めてコップを持つて立つた。一同コップを口にあてた。武本はまだ立たない。

「武本先生、お立ち遊ばせ！」

武本も立つた。一同飲んだ。

「なアんだ。馬鹿々々しい。これでグレタ・ガルボは武本グレタになつちやつたのか。」

「先生！」

送方もない亂入者だ！ 婦長だ！ カンピョウだ！ 皆の苦手だ！

婦長はグレタ・ガルボをながし目に見た。

「もう、およろしくいらつしやいますか。」

御丁寧な御挨拶だ。

「御手数をかけましてすみませんでした。」

「どう致しまして。やつぱり御婦人は手術室などへおはいりになるものではありません。手術に關係のない方は……私でさへ手術室へ入る事は御遠慮致して居ります。お若い先生方などちつともさう云ふ事をお考へ下さらずに、面白半分の方をお許しになつて困りものです。」

「何？」

チャールス・ロジャースだ。仲間からおもちやにされた腹いせが婦長に破裂したのだ。

「何を云ふのだ。誰が此人を手術室へ入れたと云ふのだ。」

「どなたかは私は存じません、それを檢へましても……。」

「馬鹿！ 先生が許したのだ。」

「え、諸木先生が御許し下さつたのです。」

さうだ、先生だ。先生がさつき御自分で云はれた。」

「……」

婦長の唇がふるへた。が態度は海千山千だ。

「今日の御手術の大小路様の受持はどなたですか。先生が唯今、御診察中です。」

「先生？ そいつアいけねえ。」

酔つ拂ひが狼狽して口の側の泡を手でこすつて廊下へとび出した。静々と婦長が出て行く。

一同ボカンとしてその後を見送つた。

三

午前六時だ！ 今朝も武本が研究室へ出て來た。昨夜あたり郷里の四國から到着したのだから

う。大きなざるが一つ武本あてに来て居た。

人間の器官で駄目になつたものを、動物の同じ器官と入れ代へをする、と云ふ考へは前から外科醫者の考へてる事だ。肺が一方腐つてしまふ。そしたらば猿の肺を代りに入れる。猿で心細ければ、他の病氣で死んだ人間の丈夫な肺をとつて、病氣の肺と入れ代へる。實に簡單明瞭で然も効果百パーセントだ。がなか／＼出来る事でない。

武本はさう云ふ手術を考へぬいて三年だ。

で心臓の入れ代へを實驗して居るのだ。勿論動物でだ。もし、人間で成功すれば、人間の死は心臓の死なのだから、大抵の死人は生き返ると云ふ譯だ。

瀬戸内海の漁師の息子に生れて醫學士になつた武本だから、實驗動物も海のものに浮ぶのが當然だ。

心臓と云ふものは、案外強いもので、きり出しても血液やリンゲル氏液を環流してやればいつ迄も生きて居る。それを心臓をきり出した動物に植ゑつけるのだ。動脈も靜脈も手際よくぬひ合はせなくてはならない。温血動物の血は血流がとまつたり血管から出たりすると凝固する

ものだ。だから心臓の入れ換へがうまく出来ても、血がかたまるので結果がよくない。漁師の息子はすぐに魚を考へる。で鯛や鯉で二年も苦勞した。だがどうしても成功せず、徒らに研究室の小使一家の食膳をにぎはしたに過ぎなかつた。

近來武本は、血管をうまく縫ひつけるのに手數がかかるのが面白くないと思つたので、血管らしい血管のない動物を實驗材料にする事にした。

平家蟹だ！ 四國の親から、息子が博士になるためならばと、平家蟹が一週に一かご宛送られて来るのだ。平家の落武者の後世も博士を一人は製造するらしい。

平家蟹と云ふ奴は心臓はあるが、血管と云ふ様なものはない。唯組織の隙間を血は流れて居るのだ。その血は銅を含んでゐるので少し青い。

今朝も武本は平家蟹の甲羅をはいだ、甲羅のうらにビク／＼と動いてるのが心臓だ。この心臓がビク／＼動くので血液はかき廻されて全身の隙間をあちこち流れて居るのだ。

甲羅から心臓をはがして、銅の溶液の中に入れて置けば、心臓は何時間でもビク／＼と搏つて居るのだ。

町中も研究室の窓の外で、ホーホケキヨと鳴く鳥の春の朝だ。郷里の春の朝の海邊をうつとりと懐ふ武本學士だ。

来た。少し煩しくさへ思へるグレタ・ガルボが今朝も来た。駒鳥だ。

「お早うございます。」

「お早う。」

武本は平家蟹の甲羅をはがす。暴力でなくそつとメスをつかつて、甲羅と身の間あひだの小さな傷口から小さなスプーンをさし込んで、手さぐりで心臓をかき出して、心臓の出たのをたしかめて、それを銅液に投げ込んで、別な銅液から心臓を一つスプーンでひろひ出して傷口から甲羅の下に入れて、ソツとスプーンを出して傷口を絆創膏でふさぐ。

甲羅に油繪の繪具で番號をかいてから、ソツと甲羅をつく。

「弱つてるな。」

グレタ・ガルボが蟹の目をつく。目が曲つて又のびる。

「生きてますわ。」

凡そ二時間、平家蟹の心臓をAからBへ、BからCへ……ZからAへと入れ換へた。

「先生昨日の朝のはどうでした。」

「今から見るのだ。」

研究室の庭だ。ホーホケキヨはもう居ない。小さな池がコンクリートで出来て居る。廻りにあみがかよつて犬の襲ふのを豫防してある。

四國の海からの平家蟹は 海の鹽水のなかの石の下や岸の上に死屍しせうをたてる。

武本は甲羅の番號を見て、蟹をひっくり返して見る。脚の尖が赤くなつて動かない。ノートに一々十字架を記入する。

「駄目だな。」

「どうしてとせうね。」

「どうしてつて、駄目の方が當然さ。命の中心の入れ代へをやつてるのだから。」

武本は腕を組んで考へてる。

「蟹の年齢や性などがうまく合致しないのかも知れない。」

武本は一度郷里へ歸つて、蟹の生活史を調査して來ようかと思つた。

「先生之は生きてるんぢやないでせうか。」

女記者は小さな蟹を石の下から拾つて岸の砂の上に出した。蟹は目を動かした。

「おや、こいつ。」

武本が目をついた。蟹は目を曲げて、脚を動かした。

「生きてるぞ。」

武本は駈足で醫局へ走つた。強心劑を注射器に入れて持つて來た。蟹の横腹へ注射した。蟹は動いた。逃げ出した。

「しめた。何號だ。」

甲羅にはRと綠色に書いてある。武本は夢中になつてしまつた。

「先生、私明日から十六ミリを持つて來ませう。そして活動にとつて置ませう。」

「さうだ、君持つてますか。」

「社にあります。」

「ではたのみますよ。」

二人はニコ／＼と笑つた。

「しめたなア。これで曙光を見出したんです。」

「お目出度う存じます。」

「まだ書いてはいけませんよ。當分は秘密ですから。」

「え、……で先生、これが成功すれば、人間の各器官の入れ代へも出來ますね。」

「段々と、一步々々と研究して行けば……。」

「最後には……。」

「死者を蘇らせる事が出来る。」

「すばらしい事になりましたね。」

グレッタ・ガルボがしばらく春の朝日の下に立つて考へて居た。

「先生、此實驗が成功すれば、まだ外にもいゝ事がありますわ。」

「外に？ 何です。」

「あの昨日の華族のお嬢さん、あの方の女性も蘇る……。」

グレタ・ガルボは眞紅になつて、自分の言葉に恥かしがつた。武本は昨日の手術の局所の惨酷な怪我を思ひ出した。

「……そいつは……」

グレタ・ガルボは眞紅になつたまゝ、小聲で云つた。

「誰か一人女性が犠牲にならなければ……」

矢張エロとグロとナンセンスの、時代兒の春の朝だ。明日の朝は十六ミリを二人して朗らかに持つて来るかな。

産婦人科學教室

—

「バスコントロールの研究」と題する春日學士の論文は、目出度く教授會をパスした。

春日學士は貧乏人の子で、學生時代は血の出る様な苦學をした。卒業と共に彼が産婦人科の助手になつたのは、バスコントロールの研究をしたかつたからである。彼は此研究によつて復讐したのだ。

「おい、春日。バスコントロールの研究などしたら、此教室の半分はなくなるぞ。」

と同僚が冷かした。産婦人科だから、お産の方も大切な仕事なのだ。婦人病の大部分の治療も妊娠を容易にするのが唯一の目的だと云つていゝのだ。だからバスコントロールの研究が成功すれば、お産が此世からなくなつてしまひはしないかと云ふ心配があるのだ。

「うん、出産数の減ずる事は確かだ。がこんなブルジョア病院の出産は減じはしないさ。」

春日學士の語調でも分る通り、彼はプロレタリア意識に燃えて居るのだ。

「僕は此研究によつて、此世の中から貧乏を追つ拂ふのだ。防貧の一手段として僕はバスコントロールを研究してるのだ。」

春日學士の母は十二人の子を生んだのだ。その三番目が彼なのだ。

……こんなにならなくと生れて来たから貧乏になつたのだ……

と父も母も云つてゐるのだ。それが春日學士の研究の動機だつたのだ。ブルジョアは子を産んで立派に教育出来る。ちつとぐらゐ頭の足りない子でも、ブルジョアの家に生れれば、親の光で仕事が出来て搾取の方だけは差支なく出来る。だからブルジョアは子を産んで、ます／＼ブルジョアになる。春日君はかう考へて居るのだ。

春日學士は夜になると本所の自分の家に歸つてプロ階級の診療を引受けて居る。時に自分の専門の關係で、お産の心配をしてやらなくてはならない場合にしば／＼ぶつかる。

「先生、何とかありませんか。お袋だけ助けて、がきの方はどうか……」

とお産の度に泣きつかれるのだ。かう云ふ時、學士は涙がとめ度もなく頬をつたつて流れるのだ。子を産ませて子が無事に育てば、貧乏は増すばかりなのだ。その貧乏は一家の全員を不幸にするにきまつて居る。生れて来る者は未知數だ。此未知數を零にすれば、それだけ既知數の貧乏は軽くなるのだ。然し醫者として彼は此未知數を零にする權利がないのだ。學士は不合理な社會制度をのりひながらかう云ふしかないのだ。

「生れて来るものは生きて行く權利があるのだ。その權利を主張するのが私達貧乏人の責任なのだ。しつかりやらうぢやないか。」

これ程の人だましを云はなくてはならないのが學士には残念だつた。パスコントロールしかない、と學士は翌朝早く研究室へ行つたのだ。

二

生みたい時には生む。生みたくない時には生まない。これがパスコントロールの重要な點なのだ。プロレタリアは生みたくないのに受精妊娠出産が理想的の生理過程として後々とは行はれるのだ。本當のプロレタリアは、受精不能を來し易い性病にかゝる機會をつかむ金さへ持つて居ないのだ。

春日學士の研究は當然受精阻止を中心として居る。受精したならプロレタリアはどうしても受精する健康度に居るのだ。梅毒などを買つて早期流産ばかりして居る中流階級をうらやむ程に金がないのだ。

受精すれば必ず出産する。母子健全なのだ。だからパスコントロールは受精を阻止するしか

ないのだ。春日君の研究もこの受精阻止にあつたのだ。

春日君の論文が教授會を通過した通信が新聞社に入ると、研究題目が時代の問題である關係上、後々と新聞記者が、春日君を教室へ訪ねて來た。

「どうか論文の内容に就いてお話し願ひたく思ひますが。」

と云ふ記者は他人より自分に於て必要を痛感して居る事を話した。

「何れ近日中醫學雜誌で發表致しますから。」

「それはそれとして、決して他言を致しませんから、先生の御研究の方法……つまり最も理想的のバスコントロールの方法ですな……實は三人目が生れて五十日程になるので、今迄の例で今が一番危険な時なんですから。」

「どうかもうしばらく……」

「辛棒せいとおつしやる譯で。あはゝゝ。」

次に來たのは老人と云へる程の記者だ。

「御研究は矢張りその鼠とか兎とかでゝすか。」

此間は春日君を不愉快にした。

「僕は人類の社會に必要である、恐らく焦眉の急である問題を研究したので。鼠や兎から研究をすゝめる程の餘裕を持つて居ません。」

「ははア、すると人間で實驗をなさつた譯ですな……」

「さうです。生きて居る人間です。」

「と、おつしやると、まア御自身で……」

「いや、さうではありません。あなたなどはブルジョア新聞の方だからお分りないでせうが私達プロレタリアの仲間は防貧の第一條件としてバスコントロールをしないでならぬ立場に居るのです。みんな眞剣になつてそれを考へて居るのです。だから私の考へ出したバスコントロールの方法を實驗して、その結果を正直に私に報告して呉れて、私の共同研究者になつて呉れたのです。その報告の統計的研究が私の論文なのです。」

「なる程それは……してその方法は？」

「あなたは何の必要があるのです、その方法を知つて。」

「社會に一分も早く先生の御研究を發表するのが私の義務です。」

「一寸御待ち下さい。此研究は眞剣な學術的研究です。だから好奇心やチャアナリズムには關係がないのです。」

春日君は此老記者を置き去りにして室を出てしまった。が此室のドアの外には「女性の友」の老嬢記者が春日君を待ち伏せして居た。

「先生、一寸一二分。」

老嬢は名刺を出した。春日君は「女性の友」と云ふ雑誌が廢娼問題に力こぶを入れて居ると同時に「生めよ殖えよ」とバスコントロールに絶對反對の態度をとつて居る女流老教育家が主幸して居るものなのを知つて居た。

「女性の友ですか、あなたの社などは僕の研究に關係ないでせう。」

「いえ、大いにあります。社長が申しましたバスコントロールが實行される事になれば、主として上流中流家庭に行はれ易く、下層階級には行はれない。その結果下層階級の人口が増加して寒心すべき結果を來す。此點に就いて先生の御意見を、と申しました。」

春日君は皮肉の笑ひを洩らした。

「御心配御無用と御傳へ下さい。あなたの所謂上流の御家庭で子を生まなくなれば、それだけ將來の搾取者が減少しますつて云つて下さい。それが私の復讐であるのですから。」

春日君は研究室へ行つてしまつた。

三

春日君の論文が教授會をパスして一ヶ月になつた。グレタ・ガルボが病院の正門前で歸らうとして出て來た春日君をつかまへた。

「春日先生、しばらく。」

「やア、春も末だね。」

グレタ・ガルボは夏帽になつて居た。

「今先生をお訪ねして參つたのです。たつた今通信が入りましたので。」

「通信つて？ 論文のですか。」

さすがに春日君も若かつた。同日に教授會を通過した他の二人の方は二週間も前に文部省が學位授與を認可したのに、自分だけのおくれて居たのだ。

「え、さうです。」

「……」

通つたか、と春日君は自然に湧き出す笑ひをかくすのに努力した。

「先生の御意見を伺ひたいのですが。」

「御意見とは？」

「文部省の態度に就いてです。」

春日君はグレタ・ガルボの顔を見つめた。

「應接室で話さう。」

一沫の不安に襲はれながら、春日君は女記者と病院へ引き歸した。

「君、一寸應接間で待つて呉れ給へ。僕醫局へオーバーを置いて來るから。」

春日君が醫局へ入つた時、同僚の一人が云つた。

「今、先生が君を呼んでたよ。まだ先生は御部屋だらう。」

「さうか」

春日君は教授室へ行つてドアを打つて中に入つた。歸り仕度をして居た教授は春日君を見て云つた。

「今、君をさがした。こつちへ來給へ。」

春日君は教授に向つて坐つた。

「一寸困つた事が出来てね……實は君の論文がね……」

教授は云ひにくさうに後を云ひ兼ねた。

「文部省でいけないと云ふのですか。」

「さうなのだ。」

「僕が醫學博士として不都合な過去でもあると云ふのですか。」

「いや、そんな事は決してない。實に文部省の御役人なんて分らんものだ。君の論文がパスコントロールだからいかんと言ふのだ……そんな馬鹿な事と思ふから、部長と僕と今日文部

省へ行つて来たのだが、……かう云ふのだ。論文そのものは教授会で醫學の進歩發達のために貢献したものと認めただから十分に學術的價値はあると認める。がパスコントロールそのものは、文部省として國家の爲に必要なものとは認めて居ない。一利一害があると認めて居る。内務省でも意見はまだ一致して居らない。反對意見が全くないならばまだいゝが、省内でもパスコントロールには強力な反對がある……かう云ふのだ。僕も部長も大いに論戦したが、向ふは、例へば殺人の最も理的方法を研究した者があつた時、それは學術的に十分價値のあるものであつても、學位論文としても文部省は認める事出来ない。程度の差はあるがそれと同様だと主張して一步も譲らないのだ。それで先程教授會を開いて報告したが、教授會でも議論百出で文部省の態度を抗撃したが、何しろ認可權は文部省にあるのだから何とも仕方ない……で結局君は又いくらでも論文は出来る才能のある人だから、と云ふので學校から認可申請を自發的に取消す事になつたことだ、誠に君には氣の毒だが、今君の手をつけてる研究の方が出来るのも近いから、あれを出す様にして呉れないか。」

春日君は教授の言葉をきゝながら、教授の恩情には動かされたが、文部省の考へ方には心の

底から憤りを感じた。

「有難う存じます、よく分りました。唯先生文部省の官吏なんかには分らない事ですが、私の様に本所の労働者の子に生れた者から見れば、パスコントロール以外に私達階級を救ふ手段はないのです。資本主義制度の下では階級闘争もみんな資本家の走狗のために敗慘の涙をしぼらせられるだけです、だから貧乏からのがれるには、残念ですがパスコントロールなど云ふ退嬰的な消極的な自殺的な手段を餘儀なくされて居る實情です。そのパスコントロールさへブルジョア階級は認めようとしなないので今日はつきり私は知りました、こんな不合理が此世にあるでせうか。」

春日君は自分の親兄弟や隣人の立場を思つてポロ／＼と涙を出した。
教授は春日君を我子の様に見つめた。

「もつとも、前から君の事はきいて知つて居た。君としてはさう思ふのも誠にもつともな事だ。だが君、世の中と云ふものは直情直行では行けない事が多いのだ。今君の云つた言葉は、僕は君の言葉として當然と思ふが、文部省あたりの人は、きつと君が左傾してると云ふだ

らう。だからなるべくさう云ふ事は云はない方がいい。つまり心のゆとりとも云ふものがなくては、世の中は渡れないのだ。」

教授の言葉は春日君に理解出来た。春日君はそれを承認出来ない階級に生れ、又それを否定するイデオロギーを生みつけられてゐるのだ。

「有難う存じます。」

と云ふしかなかつた。

「まア何事も一身の修養と思つて、これにへこたれたり、やけになつたりせずにしつかりやり給へ。」

春日君は教授室を出て、オーバーをひつかけて廊下に出た。どうしてやらう、どう復讐してやらう。彼の心はにえくり返る程の憤怒に燃えて居た。

「先生。」

グレタ・ガルボだ。

「……」

春日君は女記者などに係り合ふ餘裕がないのだ。

「僕は今日は失敬する。」

さつさと廊下をあるいて戸外に出た。グレタ・ガルボは後を追つて来た。

「文部省の役人なんて實に譯の分らん人達です。論文の通過した日に先生が新聞記者にお話しになつた、あんな一寸した言葉で、先生を左傾してる人と認めるんですから。」

病院の門を出かゝつた所で春日君は此言葉をきいたのだ。

「それは、本當か。」

「え、私の方の社長が今日文部省からきいて来たのです。文部省では先生が夜間本所で労働者を診療なさつたり、洋モスの爭議の時に負傷者を治療なさつた事などを知つて、みんな先生の左傾の證據にして居るのです。」

春日君は大きな目を一層大きくして女記者に投げつける様に云つた。

「ようし、分つた。畜生！ イデオロギーより實行だ。君書いてくれ、春日は生きた論文を書いたのだ。その論文が學位に値するかどうかを、俺は今日から實際に見せてやる。おれの論

文が、どれ程實行力に富んで居たかを奴等が知る時には、もう俺は學位なんて云ふ内容のない紙つべら一枚をけとばして、完全な復讐をとげてるのだ。力だ、俺の力は奴等がたよりにしきつて居る金ではない、俺の力は、熱石の智力だ。金は彼等の専有物と夢みて居る、智識は俺達の力にも油にもなるのを見て居るがい……」

春日君は折から來た満員電車にとびのつた。出陣の勇士のオーバーはボロくだ。

藥物學教室

—

藥物學教室の晝の食堂だ。

「どうも變だぜ。僕等には山口と京田の氣分が分らんよ。」

「然し僕には不思議でないよ。あの二人は双子と云はれる程の仲なのだから、二人してグレタ・ガルボと仲好くする事も可能だと思ふね。」

「小學から中學高等學校大學と二十有餘年の親友には相違ないが、兄弟で一人の細君ですませるのはアフリカの土人だけだらうよ。」

「だからさ、アフリカの土人だと思へば不思議はないぢやないか。」

「山口と京田の方はそれでいゝとしても、グレタ・ガルボの方はどう云ふ考だらう。」

「そりやアフリカの土人の女にきかなかちや分らん。」

と云ふ程山口と京田の二人は親友で、然も近來東京の各大學醫學部で問題になつて居る女記者グレタ・ガルボに二人して夢中になつてるのだ。

「が、意氣地のないのはおれ達さ、此教室には山口京田しか居ないとグレタ・ガルボに定められて、岡燒き評定日も足らずだからな。」

が山口と京田はグレタ・ガルボが登場して以來、決して今迄の様な仲好しではないのだ。心の底では仇敵同志なのだ。唯表面はお互に一層親密を装ふ必要があつて、お互にも又他からも親密の度を加へて居る様に見えるのだ。

由來仲好しは性質に於て全く反對の處があるものだ。山口の方はアクチーフであり京田の方

はいつもパツシーフだ。山口は京田を殺してグレッタ・ガルボを一人じめにしようとして計畫して居るし、京田の方は専らグレッタ・ガルボの歡心を買はんとして居るのだ。

山口は今モルヒネの研究をして居る。此研究が親友の命をとる結果になるのだから恐ろしい。モルヒネは $C_{17}H_{19}NO_5$ と云ふ分子式を持つて居る。これから水一分子をとると $C_{17}H_{18}NO_5$ となつてアポモルヒネが出来る。モルヒネは鎮痛や催眠作用が主だが、アポモルヒネは嘔吐劑だ。モルヒネそのものにも、嘔吐作用が幾分あるので、モルヒネ自殺は飲み過ぎると吐いてしまつて失敗するし、飲み足りないといふ二晝夜間眠り込んで目出度く目が醒める。山口の研究は此モルヒネの持つ種々の藥物作用が、モルヒネ分子の構造上どの核にあるかを確定するにあるのだ。

だから犬がキヤン／＼泣いて藥物學教室は近所迷惑だ。山口が犬を試験材料に使つて居るから。モルヒネは誰でも知つてる様に習慣になる。少量死注射して行くと遂に恐るべき程の大量を使つても中毒しなくなる。此習慣性はモルヒネに慣れるとモルヒネを體內で分解する力が出て來るのだと云はれて居た。

然し犬を百匹も殺し得る程のモルヒネを注射しても、慣れた犬は一向平氣で居るといふ事實から想像すると、そんな大量のモルヒネが一瞬間に體內で分解されるといふのは疑はしい。だから腎臓や腸からモルヒネの大部分が排出されるか、或は腦の細胞が慣れてモルヒネに無反應になるのかの二つの可能性が考へられる。

山口は先づ此のモルヒネ習慣作用の本態の研究に手をつけて居たのだ。先づ犬をモルヒネの慢性中毒にして、大量のモルヒネを注射しても平然としてキヤン／＼とび廻る様にして、その大便と小便を集めた、大便の方からは、幾分モルヒネが出たが、小便の方からはなかく、モルヒネが見つからなかつた。小便でモルヒネの反應を見る事は今迄誰でもやつたのだが……それは一番考へ易い事に相違ない……皆失敗に終つて居るのだ。山口も又うまく行かなかつた。小便の中にある邪魔物になる尿素や尿酸を捨て、若しモルヒネがあるならば、それが全部移行する筈の溶液を造つて火にかけて濃縮して見ても、モルヒネの結晶は出來て來なかつた。

研究が行きつまつた時には方向轉換をして、袋をかぶつた様な頭に餘裕をつけるのが、由來研究のコツだ。だから山口は今迄の仕事をさらりと捨て、今度はモルヒネに慣れた犬の腦細

胞が果してモルヒネに對して不感應になつてゐるかどうかの研究を始めた。モルヒネの急性中毒の時の特徴の一つは眼の瞳孔が極度に縮小する事だ。此事實を標的として、モルヒネの慢性中毒になつてゐる犬の頸から上だけを截つてリンゲル氏液の環流で生かして置いて、モルヒネを送ると、立派に瞳孔反應が出た。脳の細胞が不感應になつて居ると云ふ想像も間違つて居るらしい。

此邊迄研究が進んで、山口の頭腦が五里夢中に迷つた頃、グレタ・ガルボが登場したのだ。

二

グレタ・ガルボにほれる權利と義務とは、東京の醫學部のすべての人に公平に分布されて居るのだ。だから山口がグレタ・ガルボにほれたのは不思議でない。それと同じ理由で山口の親友京田が又彼女にほれたのも當然だ。唯時期を問題にすれば、山口の方が先に彼女にほれたのだ。

「僕はどうもグレタ・ガルボに魂を奪はれた様な気がする。」

と山口は早く京田に話したのだ。山口はアクチーフの男だから、こんな事をすぐに京田に話したのだ。その山口の心をグレタ・ガルボに傳へるのが親友としての京田の義務であると感じた京田は、夕暮おそく彼女が京田一人しか残つて居ない研究室へ來た時

「山口は本氣であなたを愛して居ますよ。」

と云つたのだ。

「それは山口先生の御自由ですわ。恰度私が京田先生を戀して差支ないと同様に。」

「?.....」

京田はハツとした。もうその時グレタ・ガルボは京田の頸にしがみついて、接吻を強制したのだ。だから京田は自分の權利を實行したのだ。

「私、先生の様な方が理想の戀人だつたのです。第一先生の御仕事は、戦線の勇士の態度だから、私すきー」

實際彼女の言葉は正しいのかも知れない。京田の仕事は癩の特効薬の研究なのだ。京田は癩の撲滅を生涯の仕事として居る。然もその研究の結果造られた液を先づ自分のからだに注射

して見て、毒性の検定をして、それから癩療養所へ危険を犯して出かけて行くのだつた。
 「私、先生が一身を犠牲にして研究していらつしやる態度には頭が下りますわ。若し癩が病
 毒を植てすぐに發病するものならば、私先生のお手で病毒を植て戴いて、實驗材料になります
 わ。」

若い京田はすつかり感激してしまつた。京田は彼女を抱いて云つた。

「可愛いあなたを、私、そんな事は……」

「出来ないとおつしやるの？ 度胸のない方ね。」

京田は彼女の敵でないのだ。京田は完全に彼女に捕へられてしまつた。此夜以來京田と彼女
 とはダンスホールや帝劇の廊下で、人目に立つたのだ。

卑劣だ！ 卑怯だ！ と山口は京田を仇敵視し出した。山口の研究は、京田の生命を如何に
 して、證據を遺さずに奪ふかの方法に變つたのだ。が山口は今迄の様に落着いて冷靜に研究を
 一歩々々進めて行く餘裕がなくなつた。

京田と彼女との仲が日一日と近く深くなるのを山口は感じた。京田は正面から自分と彼女と
 の仲を山口に云ふ勇氣がない陰性の男だ。だから口に云はずして山口に覺らせる方法しかとれ
 なかつた。彼女と京田とがつれ立つて遊びに行く時には、京田は山口を誘つた。山口は内心の
 秘密を京田にさとられるのを恐れたので、快く京田の申出をきいて、男二人は女一人を仲に
 して一緒にたのしく幾夜を過して居た。

山口は京田とグレタ・ガルボとが、特別な仲であることをほのめかすのを聞きながら、復讐の
 日等待つた。がもう落着いて居られなくなつて來た。山口は京田を殺す手段として最も手近に
 ある方法を選んだ。それはモルヒネの慢性中毒になつて居る犬の肉を京田に食はせると云ふ方法
 だ。山口はモルヒネの慢性中毒犬にモルヒネの大量を注射して、犬の平然として居る理由をか
 う考へたのだ。尿にも大便にも左程のモルヒネは排出されない。然も中毒した犬の脳はモルヒ
 ネに不感應でない。だから恐らく大部分のモルヒネは筋肉内に固着するか、或は肝臓あたりの
 臓器に吸収されて、血液からは急速に姿をかくして、筋肉や臓器でおもむろに分解するのであ
 らうと。

だから犬の筋肉や臓器を食はせれば必ず急性中毒になる。然し京田だけに食はせてはいけな

い、自分も食はなくてはいけない。完全に中毒するだけのモルヒネを食つて、自分だけ中毒しないためには、自分だけモルヒネの慢性中毒になつて居る必要がある。

山口は早速一方犬に猛烈なモルヒネ慢性中毒を起させると共に、自分自身の中からだにもモルヒネを注射し始めた。凡そ二月が過ぎた。山口の計算では犬を殺す直前に人を十人以上殺す程度度のモルヒネが注射出来るのだ。そしてその犬の肝臓や肉を四分の一斤食へば確かに京田は死ぬ。そして自分は確かに大丈夫なのだ。

三

「山口が下宿で夕飯を御馳走するから来いと云ふから、君は僕の研究室の前へ午後八時に來給へ。ダンスホールへ今夜は二人だけで行かう。」

グレタ・ガルボに別れた京田は殺されるために山口の下宿へ行つたのだ。下宿で山口は牛肉と酒を揃へて待つて居た。牛肉と犬の肝臓と犬の肉なのだ。

「牛肉と鶏の臓物と兎の肉だ。」

山口は用意周到だ。二人は食つた。飲んだ。京田はメートルをあげる山口の顔を見ながら時計ばかり見て居た。山口は今か今かと京田の様子を見て居た。京田の態度がソワソワして來た。そろ／＼だな、と山口は快心の笑をもらした。がどうも京田は山口の思ふ症状を起して來ない。眠くなるだらうと思つても一向眠くなさうだ。變だな、と思つて山口はしきりにあせつた。ふと山口は嘔氣を感じた。

「あッー」

と思はず叫んだ。

「どうした。」

京田は山口を見た。しまつた！と山口は思つた。モルヒネを水に溶かして煮沸すれば、ナポモルヒネが出來ると思ひつくとます／＼嘔氣が強くなつた。「一寸失敬」と山口は便所に立つて、食つたものを殆んど吐いてしまつた。十五分程して部屋に歸ると、京田は平然として坐つてまだ肉の残りをつゝいて居た。

「今教室の小使から君に電話がかゝつたよ。君が今日決して食つてはならないつて云つた犬

の肉を、知らぬ間に解剖の小使が持つて行つて食つてしまひましたつて云つたよ。それで分つたよ。どうもさつきから變だと思つてたのだ。犬を食はせたな。」

それをきくと、山口の頭は全く混亂してしまつた。

「そいつは大變だ！」

山口は夢中になつて着流しのまま室をとび出した。京田も彼女とのランデブーを思ひ出して山口の後を追つた。山口は下宿をとび出してすぐ近い解剖教室の小使室へ向つた。

京田は解剖教室の前を素通りして、薬物學教室へ行つた。研究室の廊下にはグレタ・ガルボが立つて居た。二人は抱き合つて接吻した。

「山口にだまされたよ。犬の肉を食はされつちやつた。」

「まあ、人が悪い方ね。もう絶交なさいよ。」

其處へガタガタと下駄のままの音が廊下にした。山口だと思つたので、京田は女のかたをかかへて自分の室へ入つた。程なく隣の山口の研究室のドアがあいて、ガタガタと下駄の音がした。一二分後で物音は靜まつた。

「山口さんでせう。一寸行つて見ませうか。」

「あゝ。」

二人はクスクス笑ひながら隣の室のドアをそつとあけた。電燈のまばゆい室に、山口は自分分の上腕をまくつて、注射をして居る所だつた。

京田は吾を忘れてとび込んだ。

「どうしたのだ。」

注射を終つた山口は椅子に坐つて京田の顔を見上げた。

「何の注射だ。」

と京田は注射器と並んだ瓶に貼つてあるレッテルを見た。鹽酸モルヒネ一〇パーセントと書いてあつた。

「おや一〇パーセント？」

山口はうなる様に云つた。

「おれはモルヒネ中毒なのだ。」

その時グレタ・ガルボが進み出た。

「まア先生は。御自身でモルヒネ中毒におなりになつて研究していらしたのですか。勇まし
いわ、戦線の勇士！」

彼女は狂喜して山口の前に腰を折つて男の膝に顔を伏せた。山口は女の頸筋を見つめた。と
京田は一時の心の動搖を強いて静めて山口に云つた。

「ああ、君に話すのを忘れて居た。昨夜雑誌を讀んだらば、帝大の薬物で、君と同じ仕事を
して居たよ。モルヒネ中毒の犬の尿を濃縮してもそのままではモルヒネは析出しないが、モル
ヒネの結晶を一寸入れると、急にモルヒネの結晶が山の様に出て来るさうだ。だからモルヒネ
犬は大部分のモルヒネをすぐに尿から排出してしまふのだよ。」

「？……」

山口は棒立ちに立つて京田を見つめた。グレタ・ガルボは山口と京田を代るく見た。

どちらがより勇士なのだらうと。

皮膚科學教室

—

今日はグレタ・ガルボ皮膚科の教室へ現れた。

「坂田先生、先日の結果はどうでしたでせうか。」

「こんな室へ無暗にはいつて来ちやいけないな。」

坂田學士は口程にとがめても居ない様だつた。

「何をしていらつしやるの。」

一寸分らなかつたらう。高いベッドの上に白い布がかゝつて居る。その布の一部に穴があい
て羽二重の白さの地に、蒼黒い方五分程の斑點があるのだ。その斑點へ、坂田は針の様なもの
をさし込んだ。少し白布が動いた。

「痛いですか。」

「いえ。」

思ひも寄らず、白布の一端から返事があつた。グレッタ・ガルボは吃驚して聲のした白布の端を見つめた。聲は女だつた。人間がベッドにのつて居るのだ。白布の穴から見えて居るのは女の肌だつたのだ。恐らく右の乳あたりだらう。斑點はあざだつたのだ。

グレッタ・ガルボはそれと知つて、坂田の耳に口を寄せた。

「何をしていたらつしやるの。」

「あざをとつてるのさ。」

坂田は案外の大聲で答へながら、右手をのばして机の上のボタンを押した。

「今度フランスから、到着した機械さ。電気であざをとるのだ。」

「まアあざがとれますの。」

「とれるとも。見給へ、此邊はもう分らなくなつちやつたらう。」

云はれて見れば、あざの周圍がホンノリ蒼かつた。

「あざは雪狀炭酸でもとれるが、此機械の方が早くとれる様だ。」

坂田は皮膚にさしてある針を少し宛動かして行く。

「私の先日の反應はどうでしたらう。」

グレッタ・ガルボが又きいた。

「強陽性だ、驚いたね。いつ誰から引きつけたのだ。」

「うそでせう？」

一週間に女は坂田に梅毒のワツセルマン反應をたのんだのだ。彼女は梅毒などある懸念は全くなかつたのだ。唯坂田に對して自分が處女でない事を間接に知らせる一つの手段として、反應を見て呉れたのんだのだ。

「ほんとはうそさ。全く陰性さ。だがワツセルマン反應は陰性だからと云つて、梅毒がないとは云へないよ。」

「さうですか。」

それで彼女の目的は果されて居るのだ。が尙もう一息彼女は自分の目的の達成を期して置き

たかつた。

「でも陰性ならば 他にはうつらないでせう。」

グレタ・ガルボの目は意味深く坂田を見て居るのだ。

「先生少しいたみます。」

白布の下から聲がした。

「や、失敬。話に氣をとられて、うっかりした。今日はこれでやめませう。」

坂田は肌から針をぬいた。ポツリと針の穴から血がふくれ出た。

「さアすみしました。」

と坂田は白布の裾の方をはぎかけた。

「あら、先生、わたし……」

白布の下の女は白布の下の手を動かして顔にあてたらしい。

「なアに、はづかしがるには及ばない人ですよ。雑誌の女記者だから。」

白布の下の女は決心したらしく、白布の下で胸をかき合せて、白布をとつて起きた。つぶし

島田のゾツとする様な美しいあで姿が現れて、グレタ・ガルボに笑ひかけた。かうなるとグレタ・ガルボも意氣地がなかつた。赤くなつて下を向いた。藝者は落着いて帯をとりてみづくろひをした。それをチラ／＼上眼使ひでグレタ・ガルボは見る事しか出来ないのだ。すつかり帯をしめた藝者は、立つて待つて居る坂田に云つた。

「ありがとうございます。では又明日……先生、今夜いらつしやいませんか？ お待ちしていますわ。いつものといで。」

「あゝ、十時頃。」

藝者はグレタ・ガルボなどを物の數とも思はぬ様に云ふだけ云つて出て行つた。

二

「どうした。いやに考へてるな。」

藝者がドアから消えた時、坂田はまだ下を向いて居るグレタ・ガルボの頭の上から云つた。

女は始めて顔を上げた。嫉妬の眉が寄つて居た。

「綺麗な方ですね。」

女の嫉妬はかう言葉に出るのが普通だ。

「あゝ、なか／＼綺麗だよ。特に肌は皮膚科的に見て申分ないな。」

グレッタ・ガルボは方向轉換するしかなかった。

「先生、あの、刺青もとれるでせうか。」

「とれない事もない。君あるのか。」

「……」

彼女は刺青を持つてるのだ。然も内股にだ。

「見せ給へ。」

坂田の好奇心は燃え立つて来た。グレッタ・ガルボは意地になつて居た。あんな藝者などにまけるものかと思つてるのだ。舊時代に屬する藝者のイデオロギーなどに、モダンがまけてたまるものかと、思つてるのだ。現代は暴露の時代だと思つてるのだ。暴露によつてのみ與へられる強烈な刺戟こそ、現代の男性を動かし得るのだと信じて居るのだ。

「えゝ、見て下さい。そしてどうかその刺青と共に私の過去を洗ひ去つて下さい。」

彼女は勇敢にベッドにのぼつた。そして目をつぶつた。

「右の内股です。」

坂田は醫者らしく彼女の顔に白布をかけた。

「そんなものいりませんわ、わたしは。」

彼女はベッドに起き直つてスカートをまくり上げた。そしてパンツをグイ／＼と上にめくつた。

「どうぞ。」

彼女は又ベッドに倒れた、坂田はパンツを無理に押し上げた。KSの二字が組合されて見えた。

「イニシアルだね。折角のものだ。このまゝにして置いた方がよかないかな。」

「いゝえ、すくなくともKだけは消して下さい。」

「Kだけ？」

「えい、Sは先生にも……」

なる程、坂田もSだつた。坂田はこみあげて来る可笑しさに襲はれてしまつた。

「あは、度胸はいいな。だが俺達の様に梅毒や淋病で飯を食はうとして居る者には、君のトリツクは無効だよ。出直し給へ、グレタ・ガルボ！」

坂田はさういひ捨て、ベッドをはなれて、室の隅の手洗ひでゴシ／＼と手を洗ひ出してしまつた。

三

グレタ・ガルボが醫學雑誌の記者になつて以來、思ふ通りにならなかつたのは、坂田が始めてだつたらう。だからグレタ・ガルボはます／＼意地になつて來た。彼女は毎日の様に坂田の研究室に現れた。

「坂田の奴とう／＼グレタ・ガルボに食ひつかれたな。」

醫局での評判なのだ。看護婦などは例の藝者花吉とグレタ・ガルボを兩手の花として居る坂

田に絶對の悪意を示す様に迄なつた。

グレタ・ガルボは花吉の居る前でも刺青のKを消して呉れとたのんだ。

「……そしてSだけはそのままに……」

花吉はそれをきながら平然として知らんふりをして居るのだ。その態度は時にグレタ・ガルボをいら／＼させたり、或は又無智な女として花吉を輕蔑させたりした。

「Kを消したいならば、KS君にたのむさ。」

と坂田も又相手にしなかつた。

花吉のあざは四五日で跡もなくとれたのを、グレタ・ガルボは認めなくてはならなかつた。

「もうすっかりとれたよ。」

坂田がかう云つた日の歸りがけに、花吉はグレタ・ガルボの前で云つた。

「では明日から左の方を御願ひします。」

「あゝ。」

花吉は今日も落着いて帯をしめて居た。グレタ・ガルボは胸の底から湧き立つて來る憤怒を

辛うじて堪へながらいつた。

「まだ外にあざがあるんですか。」

花吉は恥ぢる所なく答へた。

「ええ。まだいくらでも……無盡蔵ですわね。」

と坂田と目を見合せた。

「うん實際無盡蔵だ。」

坂田迄相槌を打つたので、グレタ・ガルボは口惜しさに度を失つてしまった。彼女は眼に一杯涙をためながら、坂田に懇願するしかなかった。

「先生、そんなに私をいぢめないで、どうか私のもとつて下さい。」

坂田は朗らかに答へた。

「とるのは何でもないが、KS君かSK君か知らないが、その人に怨まれるからいやなのさ！。強いてとりたいたならば、此教室の誰にだつて頼んで見給へ。喜んで君のためなら一肌ぬぐ連中が多いよ。」

「でも私、場所が場所ですから、いやなのです。先生には一度みて戴いたのでですから、あきらめて居ますけれど。」

「だから、場所が場所だから尙更ら誰でも喜んであつかつて呉れると思ふのだ。」

グレタ・ガルボは遂に此室に居たゝまれなくなつて逃げ出てしまつた。

「いゝ氣味ね。」

「あはゝゝ。」

花吉と坂田はグレタ・ガルボの出て行つたドアを見て大笑ひをした。

四

一週間程グレタ・ガルボが來なかつた。坂田と花吉は午後の時間が、所在なさに困る程だつた。

「たうとうあの人があきらめたのよ。」

「馬鹿でなければ大抵分つたらうよ。あの女はまるで淫賣婦さ。あの調子で今迄あらし廻つ

て成功して居たのだから、醫者なんて云ふものはくだらないものさ。」

「そんなうまい事おつしやつて、あなたとつて分りはしないわ。急にあの人來なくなつた事など私何だか變だと思ひますわ。」

「つまりん事を云ふなよ。あんな露骨なやり方にひつかかる様なおれぢやないのは分つてゐるぢやないか。」

「でも、此頃はパーでもカツフェーでも随分露骨になつて來てますからね。そしてその露骨な所が、男の方にとつては強い刺戟になるのだつて話だわ。」

「露骨は俺はまつびらだ。仕事は露骨なのだから、露骨にはもう食傷してゐるんだ。」

話しながら坂田は針を花吉の皮膚に通しては電氣をかけて居る。

「あなた、まだなかく研究はお済みにならないの。」

「もうしばらくだ。辛棒して呉れ、大體の見當はついてゐるのだから。あのとんぼの耳の後のあざはうまく行つたらう。随分かゝつたが、ちつとも跡が残らなかつたよ。」

「さうでしたね。とても旦那が喜んでましたわ。おかげで随分私をひいきにして下さるの

よ……あの變な女のは、あなたの御研究の材料にはなりませんの。」

「うん、ならない事もないけれど、あいつの態度が氣に入らないのでね。」

其處へドアが打たれたのだ。

「來たぞ。」

と坂田が注意した、花吉は白布を頭からかぶつて息を殺した。

ドアから入つて來たのは思つた通りグレッタ・ガルボだつた。

「先生、よろしうございますか。」

「どうぞ。何か用かね。」

「別に用事でもないのですが、わたしあの、N大學の皮膚科でつていたとく事にしましたわ。それを申し上げに参りましたの。」

「さうか、それはよかつたね。わざわざそんな事断りに來て呉なくともよかつたのに。」

「え、あのN大學の山村先生、大變興味を持つて下さいましたわ。」

「それは何よりだつたね。それで僕も安心したよ。」

グレタ・ガルボは坂田がいかにも落着いてゐるのが腹立たしくなつた。今迄かう云ふ場合には、どの男も嫉妬に燃えたのだつたのに、坂田だけは平氣なのだつた。女記者は戀敵に近づいた。

「あらッ、今度は頸筋ですわね。随分あざを持つてる方ね、顔だけねあざのないのは。」
その聲は輕侮の調子に満ちて居た。

「もうすみましたよ。」

坂田は花吉の頸から針をぬいた。花吉は矢庭に白布をとりかけてベッドにおき直つて、さすが女らしくグレタ・ガルボを見つめた。

「……」

言葉が出なかつた。花吉の目は坂田に救を求めて居た。グレタ・ガルボがチラと花吉を見てから坂田に云つた。

「山村先生に伺ひましたらば、あざなんかとるのは朝飯前の仕事なんですつてね。」
又も花吉が坂田を見つめた。坂田は一向あわてる様子がなかつた。

「あ、君は醫學雜誌の記者だつたね。君の雜誌に一寸一行材料を興へようかね。僕の研究は皮膚に與へた陰壓によつて起つた出血のために現れる斑點……つまりキツスさ。キツスのために出來たあざの吸収に關する研究なんだ。」
グレタ・ガルボの顔は？……徹底的の敗北に度を失つた彼女は一瞬唇をふるはせたが、飛鳥の如くドアから消え去つた。坂田はとびついて來る花吉を抱いてキツスの雨を注いだ。五分十分……花吉があどけない聲で云つた。

「あなた。もう御研究はいいのでせう。わたしおぶうでみんなに冷かされて困るのよ。」

解剖學教室

一

どうも脳味噌がなくなると云ふのだ。猫や犬の脳味噌ならば左程ではないが真正銘人間の脳味噌がなくなるのだから唯事でない。

刑務所で死んだ無籍者や、往來の行倒れで引取人のない屍體は、解剖學教室へ運ばれて廢物

利用主義制度の下で、學生や研究生の解剖實習や研究の材料になるのだ。屍體は湯船の様な大きな箱のアルコールの中に投げ込まれる。氣候の暑い頃は、アルコールから出すとすぐに腐敗するから、學生の實習は大抵冬だ。

教室の小使が屍體を箱からひっぱり出して解剖臺にのせて先づ頭部の皮膚をはがして耳の付根の一寸上へ鋸を入れる。石頭だと、なか／＼鋸の目が立たない。のみを鋸の跡にあって木槌で叩く、頭蓋骨がお皿の様にポコリととれる。其處で脳味噌が出るのだ。脳味噌と顔面や後頭の骨の間にソツと指を入れて、脳味噌をとり出して皿に入れる。脳味噌のない屍體が學生の實習用として並べられるのだ。

此取り出した脳味噌の数が、いつの間にか足りなくなると云ふのだ。助手長の室へ小使が来た。

「又先生脳味噌がなくなりました。」

「又？ いつなくなつたのだ。」

「昨夜です。昨日は私達二人で六體から腦をたしかに取り出したのです。なのに今朝は四つ

しか皿に残つて居ないのです。」

「二つ足りないのだね。そして皿は何處に置いたのだ。」

「あの屍體のつけてある室の横に置いたのです。そしてピチンと鍵をかけておいたのです。」

今朝も鍵はそのまゝかゝつて居ました。」

「此頃は宿直を二人にしてるのだらう。二人宿直しながら盗み出されるとは、どうした譯なのだ。一體宿直は何處に寝るのだ。」

「宿直部屋に居ます。」

「宿直部屋？ そんな遠い所に居ちや何人宿直したつて駄目ぢやないか。今夜からあの

アルコール箱のある貯藏室にねたらどうだ。」

「どうも先生、貯藏室に五六十人の死人と一緒に居るのは……。」

「いやだといふのか、一體夜廻りはするののか。」

「え、昨夜も二度程廻りました。二度目に夜の三時頃あの邊へ行きました時、何かコトツと音がしました。」

「音が？ それから。」

「恐ろしくなつて二人して逃げてしまひました。」

「馬鹿！ 逃げてしまつては泥棒の番人にもなりはしないぢやないか。」

「まアさういふ譯で……だが先生私達だつてあんまりいゝ氣持はしませんから。」

「チエツト 仕様のない宿直だな。」

「どうせ人間の脳味噌を盗みに來るのですから、向ふだつて命がけですからね。キツと癪病やみでさア、それが病氣を癒したい一方でしので來るんです。だから見つかれば自分が癪病と分るから、キツトこつちを殺しにかゝるにきまつてます。今も三人で小使室で相談しましたが、こんな命がけの宿直をしなくてはならないならば、一そやめてしまふかと云つた所です。」

小使は青くなつてゐるのだ。

「まアよし、何とかおれ達で相談する。」

助手長は腹立たしさと當惑とでチリ／＼して室をあるき廻つた。

二

助手長が研究室へ入つて來た。

「困つたよ。又昨夜やられたさうだ。」

「又ですか、變だな。」

五六人の研究生が助手長の廻りをかこんだ。

「小使の奴共が怖氣づいちやつてるのだから、何とも困る。昨夜も何か音がしたのださうだ。」

その物音で宿直室へ逃げ歸つてしまつたのだ。何かいゝ考へはないかな。」

「と云つて僕等だつて番人になるのはあんまりいゝ氣持はしないから。」

「だから此探偵は現場の監視を主にせず、一體脳味噌を必要とする者を先づ探ねたらいいでせう。」

「小使が怖氣立つてる今日はそれしかないかも知れないと僕も思ふ。小使はレブラ患者が盗みに來るときめてるが……」

「鼠ちやありませんかな……そして鼠が百匹も集まつてアルコールに酔拂つてダンスをやつてる物音を小使がきいたのかも知れない。」

「僕は動物園の獅子だと思ふ、明治十何年に現在動物園の獅子が池の端に出て居る土管から此境内にもぐり込んで来て、病理の屍體をペロリとなめて、歸りには土管に腹がつかへてそのまゝ死んだのを日清戦争頃になつて土管の埋替へをした時に、初めて獅子の骨を見つけたつて記録にある。」

脳味噌紛失に餘り責任のない研究生がヨクをとばした。助手長もそれにつられて笑つたが、眞顔になつて云つた。

「まアそんな話はやめにして、誰かいゝ智慧はないかな。」

「戸締を嚴重にしたらどうです。」

「泥棒がうちにあるなら駄目だよ。」

「何しろ、たとひ泥棒を見つけたつて、見つけた小使が逃げるのだから困る。だから泥棒をおどろかして腰をぬかさせる方法を講ずるしかない。一つ妙案があるぜ、脳室の中へ延髄あた

りから上手に重曹と酒石酸の溶液を別々に注射して置くのだ。泥棒が脳味噌を抱く瞬間に炭酸瓦斯が突然脳味噌の中で發生して腦がふくれる、これなら大抵の奴腰をぬかすよ。」

「さう云ふ形式なら脳味噌に燐をぬりたくつて置けばいゝさ。ポーツと青白く光つちア泥棒も降参するぜ。」

「さうだ猫入らずをぬりたくつて置くんだ。鼠の泥棒も腰がぬける事請合だ。」

助手長は研究生のヨクに腹を立て、研究室を出てしまつた。

「餘つほど降参してるらしいな。」

「さうだらうよ。こんな事で先生の御機嫌を損じてしまつちや、折角の洋行も沙汰やみになるからな。」

此處でグレタ・ガルボを登場させる。

「よう、來たな。今日はいゝ種があるぜ。」

「何ですの、先生方。」

「教室の屍體が毎晩一體宛消えてなくなるんだ。」

「かついだつて駄目よ、ちやんと知つてますわ、脳味噌事件でせう。」
 「おや、知つてるのか。……なる程君が知らない筈はない。君がその脳味噌紛失の手品師だつてな。」

「まア先生、おぼえていらつしやい。わたしレブラの血統ぢやありません、嫁入り前の娘にめつたの事を云つて下さつては困りますよ。」

「そいつは失敬した。もう亭主もちだと思つてたよ。御亭主の眉毛がうすくなつたとか噂があつたが……」

さすがのグレタ・ガルボも此毒舌には顔色を變へた。

「何とでもおつしやいませしー」

飛鳥の如く女はドアから消え去つた。がその翌日の解剖學教室は大騒動になつた。

三

教授が先づ助手長をよびつけたのが騒動の初まりだ。

「君、之れを讀んだか。」

教授が醫界ニツポンを助手長の目の前に出した。

「某大學醫學部の怪異」と大見出しだ。「脳味噌の消失一夜に一個宛」と小見出しだ。

「此教室ではなからうね。」

教授の目が助手長を矢の如く射た。助手長は新聞に一寸目をやつて教授の顔をかゞつたが、その眼光の鋭さに頭を伏せた。

「うちではあるまいね。」

「は……」

助手長の顔色が失せて行つた。

「實は……」

「何？ では此處なのか。」

「此記事程ではありませんが。」

「ではどう云ふ事があつたのだ。」

「一月前に小使がどうも脳の数が足りない様だと申しましたが、それから注意して居ました。今週に入つて二晩に四つ確に見えなくなりました。」

「困るぢやないか。何故早く我輩に報告しないのだ。」

「御心配をかけると思ひまして。實は小使の宿直を二人にして見ましたが、それでも矢張りやられました。」

「それで見當はついていますか。」

「どうも、第一何の必要があつて脳を盗むかと分りませんのです。」

「そりや君由來迷信がある！」

「その迷信を小使迄信じて居ますので。」

「小使が信じて居る？ では小使がどうかしたらいいのか。」

「いいえ、レブラが脳をとりに来ると信じて居ますので。すつかり怖氣づいてしまひまして、宿直の役をしませんのです。」

「誰だ、その小使は。」

「山崎が昨日報告に來ましたが、是非やめさせて呉れと迄申しました。」

「弱い奴だ、あんな猛烈な面の癖に……だがどうしてこんな事が外部に洩れたのだ。」

「研究員が記者にしゃべつたらしいのです。然もその女……女記者ですが、その女記者の感情をすつかり害してしまつたのです。研究室の歸りに私の室へ参りまして、自分はレブラだと云はれたと泣いて口惜しがつて居ました。此汚名をそぐために、自分は此事件の真相を極力探偵すると云つて居りました。」

「どうも若い者は無考へでいかん。とにかくこれが事實ならば容易ならん事だ。今迄に出來た事はやむを得んが、將來絶対にそんな事のない様にして貰はなくては困る。その工夫はつくだらうな。」

「小使達は怖氣づいて居て何の役にも立ちませんから、しばらく脳をとるのをやめようかと思つて居ます。」

「が然し學生の實習用の屍體は長くアルコールから出して置くのだし、又學期末に脳を學生に渡さなくてはならんが……」

「ですから頭から上をきりはなして、頭部をそのままアルコールにつけておくつもりです。」
 「ではさうするか、とにかく困つた事だ。至急探索し給へ。」
 その日から小使は屍體の頭をきり初めた。

ゴロリと頭だけが解剖室のタ、キの上のところがつて居るのだ。芋でも扱ふ様に夕方になると小使が此頭だけを、アルコールの満ちた箱に投げ込むのだ。

「頭の皿をはずせば左程ではないが、頭のない胴や、胴のない頭だけになると、いゝ氣持はしないなア。」

「でもあの室の夜廻りよりはましだぜ。」

小使が夜になると話すのだ。

四

學生が頭のない屍體の二三十にとりいつて解剖の實習をして居る。教授が助手長をつれて出て来た。學生は解剖圖と屍體を照し合せて解剖して居る。

「あ、それはいかん、その血管のすぐ下に神経がある。」

「顔面は重要な所だが、來年に廻すからそのつもりで。」

教授は一通り屍體を廻つた。

「合計十二だつたな、頭のない屍體は。」

助手長はもう一度數へた。

「はい十二體です。」

教授は貯藏室へ入つてアルコールの湯船のふたをとつた。

「一つ二つ三つ……おや十しかない。一つ二つ三つ……君數へんか。」

助手長が何度もくり返してあちらこちらに沈む頭を數へた。棒をもつて来て、全身の屍體を押しは數へた。

「どうも」

「十しかないぞ。」

助手長はソツとして室を見廻した。

「これはいかん。」

教授は腕を組んで考へた。

「君昨日は數へたか。」

「大丈夫と思ひまして、つひ……」

「來給へ、僕の室へ。」

不機嫌の教授は廊下を通つて本館へ出た。教授が教授室の前迄來た時、小使の山崎が和服で立つて居た。

「長々御世話になりました。今日は御暇乞に参りました。」

「さうか、いや長年ありがとうございます。まアどうしても氣味が悪くて居られぬと云ふ事だから致し方ないが、……これからどうするかな。」

「何か小さな店でもと思つて居ます。」

「さうか、では……」

教授がドアをあけて室に入つた。その後について助手長が恐るゝ入つた。

「實に困つた事だ。かうなつては警察へでもたのむしかない。今度又々骨ぐるみの頭部が紛失したと知れたらば、今の山崎の様に小使は連袂辭職するかも知れん。實に困つた事だ。」

教授は獨語の様にかう云つて腕を組んだ。

助手長は立つたまゝ下を向いて居た。その時突然廊下で大きな物音と人聲がした。

「何だ？」

助手長がドアをあけて廊下に出た。研究室のドアの前で五六人の人が折り重なつて居る。助手長は夢中になつて其處へかけて行つた。山崎小使が二三人の研究生に腕をねぢつけられて引き立てられた。

「どうしたのだ。」

助手長が云つた時、その目の前に立つたのはグレタ・ガルボだつた。

「脳味噌泥棒ですよ。先生方は迷信に捕はれてるからいけないのですよ。立派に醫學を收めたなんていばつていらつしても、結局頭から迷信はぬけきらないのです。その迷信をこんな小使にトリックに使はれたんですからね。」

グレッタ・カルボは朗らかに笑つたのだ。

X

X

X

三四日後醫學部事務室の前に、八名の四年學生の停學處分の揭示が出た。その日の「醫界ニッポン」は「醫學者の迷信」と題して、山崎小使が卒業試験近く腦の構造に苦しみに居る四年學生に、腦味噌一個五十圓で賣りつけた記事がすつば抜かれて居た。グレッタ・ガルボ！
ブラボウ！！！！

精神病學教室

—

大學の醫學部の各教室は建物こそちがつて居るが、軒並に一ヶ所にかたまつて居る。唯精神病學教室だけは、發狂者を收容する關係で、市の場末か郊外にある。だから氣の變な者を「巢鴨行き」と云ひ、「松澤送り」だと云はれるのだ。患者ばかりぢやない、醫者迄も、「あいつ

は松澤だよ。」とやる。精神病専門の醫者は實際少々ばかり變になる。それももつともな事だ、朝から晩迄氣のふれた患者と問答してゐるのだから、變にもならう。

精神病學の臨床講義に行く學生は教授の方まで變だと思ふものだ。教授と患者が學生の前で問答する。

「どうしてあなたは此處に來たのです。」

「日米戦争に偉勳があつたからさ。」

「何年前に日米戦争はあつたのでしたつけ。」

「もう忘れたのか、何度先生に……(先生だと知つてゐるから面白い)……話してもさう物覺えが悪くちや困る。五年前ぢやないか。」

「うん、さうだつたな。すると昭和何年だつたな。」

「昭和？ 何を云つてるのだ、明治だよ、明治三十八年だよ。」

「さうすると今年は。」

「三十八に五を足せばいいのだ。」

「で此お宮へは……（と先生が病院とお宮を間違へて話すのだ）……いつ来たね。」

「四年前の春……」

「どうして来たね、自動車だったかね。」

「タンクにのつて来た。」

「お宮へ來てるのだから、あなたは神主かね。」

「神主？ 神主は先生だよ、おれは正一位大明神だ。」

「神様が飯をたべるのは變ぢやないか。」

「だから御神酒を毎日請求してるんだ。」

こんな對話をきいてると、氣狂同志の話だから精神病學者が變だと云はれる。精神病の研究には動物が使へない。矢張り人間を使ふのだ。その實驗材料が氣がふれてるのだから、學者も氣がふれなくては話があはないのだ。

グレタ・ガルボが今日は郊外の精神病院の醫局へやつて來た。「醫界ニッポン記者」と云ふ肩書のある名刺を持つて來たのを知つた助手達は、

「おい、とう／＼來たぜ、グレタ・ガルボだ。」

噂にきいてる道場荒しの女記者だ。春の日の午後だ。郊外散歩を兼ねての進出だ。グレタ・

ガルボは今日は珍しく和服だ。

「何か面白い御研究は？」

「研究なんて何にもないよ。病院見物でもし給へ。」

彼女の光來でまぶしくなつた助手達は、さう云ひながらも、我こそと東道役になる勇氣のあるものはないのだ。

「では恐れ入りますが、一寸院内を見學させて戴きたいと存じます。」

助手達は顔を見合せた。其處へ最近歸朝したばかりの助教が入つて來た。

「あ、大山先生、先日は停車場で失禮致しました。」

グレタ・ガルボが人なつかしく話しかけた。

「さて、あなたは？」

「醫界ニッポンの……」

「あゝ、さうでしたか、わざ／＼御出迎へ恐縮でした。で、今日は？」

「院内を見學させていたゞかうと存じまして。」

「あゝ、さうでしたか、では先日のお返しとして御案内しませう。」

大山助教授がグレタ・ガルボをつれ出した。助手達はがっかりしてしまった。

「なか／＼美人だね。」

「うん新歸朝者には叶はないな、あの朗らかさは……」

二

大山助教授がグレタ・ガルボをつれて病室の廊下をあるいてゐる。

「これが重症室です、監禁室です。」

助教授がさういつて一つの室の前を通つた時、突然物音がして鐵棒の窓から絹を裂く様な女の聲だ。

「あなた、あなた。あなたつてば……」

二十二三才の髪をふり亂した女だ。

「あなた、こんなに私が思つてるのが分つて下さらないんですか。」

助教授は一寸頬を染めた。

「これですから……めつたに此處を通れません。」

グレタ・ガルボが女を見た。

「畜生、このあま。おれの亭主をねとつたな。」

凄い目付に怖ぢてグレタ・ガルボが小ささみに助教授の後を追つた。

「畜生、おぼえて居ろ、えゝ口惜しい。」

ジタバタと大きな音がした。グレタ・ガルボが立ちどまつてその物音をきいた。その時何か一寸袂にふれた感じがあつた。

「大山先生、その方は面會人ですか。」

二十五六の青年が鐵棒の窓から聲をかけたので、グレタ・ガルボはびつくりして、その窓をはなれた。

「山田さんか、とうとう此處に移されたね。」

助教の言葉は患者はき流して、両手を合せてグレタ・ガルボを拜んだ。氣味が悪くなつて女記者は先に行く助教の後を追つた。

「先生、あの患者は私をしきりに拜みました。どう云ふんでせう。」

「あれは誰を見ても拜むのですよ。妙な妄想がありましてね。人殺しをしたつて云ふのです。僕等が相手にしないので、最近しきりに狂暴なのでこつちへ移したのです。極軽い早發性痴呆なのですが。」

「まア、それで人殺しは……」

「妄想です。彼自身には勿論それが眞實なのですが、だからその人殺しをした時の事を實に詳細に話すのです。全く創作家としてはすばらしいものですがね。」

「あの、創作家と云へば鳥山清一郎さんはまだ居ますか。」

「え、居ますよ、あゝ此室だ、あそこに居るでせう。」

鳥山清一郎は痩せ衰へて、室の隅に動物園の獅子が見物人を馬鹿にする様な態度で坐つて居

た。助教が聲をかけた。

「鳥山さん、どうです。」

鳥山は物憂げに顔を上げた。

「え、相變らずです、私一つトリツクを考へました。」

「何ですか。」

「どうしても精神病院へ入院しないと云ふ患者かあるんです。それをうまく入院させるトリツクです。」

「それは面白い。どうするのです。」

「例へば大藝術家鳥山清一郎が、精神病になつたと假定します。友達が心配して松澤病院へ診察して貰ひに行かないか、と話す。彼は精神病だと思はないから……つまり自分では病識がないのです、これが精神病の重大な一徴候です……友達が降参して一策を案出しました。その病人が平常から可愛がつてる八百屋の小僧に熊公と云ふのがある。で友人が病人を訪ねて、おい、君の可愛がつてる熊公が少し氣がふれた、いくら親父が話しても松澤へ行かないんだ。君

が話せばキツと云ふ事をきくと思ふから、今から八百屋へ行つて呉れないか、とたのむので、其處で精神病患者鳥山清一郎が八百屋へ出むくのです。熊公いゝ所へつれてつてやるから行かないか。あゝ旦那となら行くよ。で三人自動車で松澤へ行つて、熊公は逃げる。病入は病室へ押し込められる。かう云ふトリックです。」

グレタ・ガルボは鳥山の氣がふれてもなか／＼ユーモアに富んだ頭の働きを感じ服したのである。助教授はニコ／＼笑つた。

「名案ですな、これからそのトリックを私達も使ひませう。」

鳥山が急に立つて窓へ来て手を出した。

「稿料を下さい、原稿と引き換への約束だつたでせう。」

助教授が五十錢銀貨を出した。

「安いな、いくら不景氣でも。まアまけておくか。」

鳥山は笑つて舊の坐へ歸つた。助教授があるき出して、グレタ・ガルボをふり返つた。

「あのトリックで自分が此處へつれて來られたんですよ。その記憶を自分の創作だと思つて

るんですよ。」

三

グレタ・ガルボは一通り院内をあるいて助教授に禮を云つて病院の門迄の庭に出た。ふと何の氣なしに袂に手をやると、何か紙が手にふれた。出して見ると端紙に細々と何か鉛筆で書いてある。

「私は實際人殺しをしたのです！」

グレタ・ガルボは一時ハツとした。がすぐにあの患者を思ひ出した。

「何度も何度も機會のある度に私は醫者に話したのです。私を精神病だときめて居る醫者は、私の話を妄想だと頭からきめて居るのです。私は一昨年の十一月五日の夜中に千住の大橋のそばの水ぎはへ二十五六才の女をだまして行つて殺して三十圓程をとつたのです。どうか警視廳へ私の事を話して下さい。此事は決して病院の醫者には話さずにく警視廳へ話して下さい。お願いします。三號室、荒木正夫。」

グレタ・ガルボはそれを見て面白くなつた。精神病患者の心の異常さにあきれ返つた。いゝ記念だと思つて、今日の探訪が無駄ではなかつたと思つて病院の門迄出た。

「失禮ですが、あなたは御面會にいらつしやいましたのですか。」

子を背負つた貧しい女だ。

「いゝえ。」

「ではこちらの病院の方ですか。」

「いゝえ。そしてあなたは？」

「あの誠に失禮ですが、山村時造と云ふ患者に私面會に参りましたのですが、どうしても面會が出来ませんのです。命がけの願ひですがその山村時造と云ふ患者が、此寫眞の患者ですかどうかを何とかして調べていたゞけないでせうか。もう三日もかうして毎日此處へ参つて居るのですが、事務へ行つたらよからうとどなたもおつしやるだけで、又事務では一向私の云ふ事をとりあげて下さりません。」

女は眼尻の涙を袖で拭つた。グレタ・ガルボは貧しい女の眞情に動かされた。

「では私一寸伺つて来てあげませう。」

寫眞を持つてグレタ・ガルボは又醫局に引き返した。助手達は折角來たグレタ・ガルボが助教授にさらはれてしまつたのを残念がつて居たので彼女の再登場を歓迎した。

「先生、山本時造と云ふ患者が居りますか。」

「あゝ、居るよ、あばれて仕方ない奴だ。」

「この人でせうか。」

グレタ・ガルボは寫眞を出した。

「間違ひなくこれだ。どうして君知つてる。」

「別に……」

「かくさなくてもいゝよ、禁治産になる程の浪費者だから、君も一口のつたのだらう。」

「禁治産？」

「あゝ、百萬長者の子だ。」

グレタ・ガルボはすぐに門前に引き返した。子を背負ふ女はかけよつて來た。

「今きました。たしかに、此方ださうです。」

「ではやつぱり……何と云ふあの人も馬鹿な人だらう。」

「どうなさつたのです。」

「お恥かしくてお話も出来ません。おかけ様で亭主を救ひ出せます。今何時でございませう。警視廳へ参らなくては……」

グレタ・ガルボは此女に妙に氣がひかれた。其處へタキシードが来た。

「東京迄五十錢！」

「警視廳迄五十錢。」

「えー」

グレタ・ガルボはまご／＼する女を車内へ引つぱり込んだ。

「すみません。私一人で警視廳へ行つて分るでせうか、心配です。山村時造と云ふ人が此寫眞の男だと云ふ事を、恐れ入りますが、警視廳で……」

「どうせ用事ありませんから、御一緒に。」

「すみません。」

「一體どうなさつたのですか。」

「お恥かしくてお話も出来ません。此寫眞は私の連合なのですが、もう一ヶ月程前にあの病院で事務員の募集がありましたので、その試験に参つたのです。それきり何處へ行つたのか歸つて参りませんのです。知合の所をあちこちと尋ねましたが、行方が分りません。三四日前突然手紙が来ました。山村時造と云ふ名で入院させられて困つてるから救ひ出しに来て呉れと申して来たのです。どう云ふ譯なのか、一向分りませんが、大の男一匹それも他人の身代りになつて氣狂病院に入れられるとは、わたし……」

警視廳へ女をつれてグレタ・ガルボは現れた。女の訴へをきいて、役人は精神病院へ電話をかけた。

「分つた、お前の亭主もよく／＼の馬鹿だぞ。山村時造と云ふ精神病患者にたのまれて二百圓貰つて身代りになつて入院したのだ。病院の方では山村家から知らせがあつたので、病室も用意して置いたから、早速お前の亭主を山村時造だと信じて入院させてしまつたのだ。病院では

お前の亭主が近頃になつて色々云つても、氣遣ひの云ふ事と思ふから相手にしなかつたのだ。山村時造本人は行方不明らしい。でも今迄無事に食べさせてもらつて、二百圓も上げたのだから、案外利口な亭主かも知れないぞ。あは、……早速病院では退院させるさうだが。」

その話をきいてグレタ・ガルボは此世の事が全く分らなくなつた。ふと例の人殺しの患者を思ひ出した。

「今日ある患者が私にこんなものを袂に投げ込みました。」

役人はその紙片を見た。

「おや、これは……」

役人は室を出て程なく歸つて來た。

「これも本當だ！ どうも氣ちがひ病院の醫者は何でもかんでもきちがひにするので、こんな事になる。困つたものだ。」

ます〜グレタ・ガルボは世の中が分らなくなつたのである。

小兒科學教室

—

猿のお尻は赤いにきまつて居る。その猿のお尻を眞白にして居るのだから天下は泰平だ。

「どうもうまく行かねえよ。」

猿をまな板の様なものに四足をしばりつけて、眞赤なお尻をにらんで落膽して居るのだ。

「坐浴でもさせて皮膚を柔かくしたらどうだ。」

研究となると同病相憐んで同僚が智慧をかすのだ。

「さうだな、やつて見るか。」

お猿さんは下向きにまな板に結びつけられたまゝ、馬穴のぬるま湯にお尻をつけられて石鹼で洗はれるのだ。唯でさへ赤いお尻がますます赤くなる、腰湯を生れて初めて使つてもらつたお猿はいゝ氣持でウンコをたれた。

「コン畜生！」

又も御腰湯だ。湯上りのタオルですつかり清められた猿のお尻にお化粧が始まるのだ。第一號猿はパツチリだ。第二號は百美人だ。パツチリも百美人も人間の役者の使ふおしろいだ。猿の赤いお尻が役者の顔の様に眞白になるのだ。その上に繻帯がかけられるのだ。

何の必要でお猿のお尻をお化粧するのか。學位論文は世間で云ふ様に、遊び半分で出来るものぢやない。博士濫造など、めつたに云つては博士様にバチがあたる。女房子供を持つ三十面さげて、猿のお尻にお化粧するのも、學問のためなのだ。

では何の研究をして居るのか、此教室は小兒科だ。猿と子供は同じなのだらうなど、早合點してはいけない。皆さんの、大事な大事な愛子の健康をいければこそその苦勞なのだ。

子供が突然ひきつけて痙攣を起したら、親はどんな氣がするか、然もそのひきつけが度々になつた。顔色も日に蒼白く、たうとう神の國へ一人旅立つたら、親はどうなさる。然もその子の死の原因が母親の不注意からだとときまつたらば、どんな氣がする。加之その母の不注意は子の父親のために母親が毎朝毎晩のお化粧に關係があると決定したらば……

鉛毒の子に及ぼす影響の研究なのだ。そんなら何故お猿を使ふのか。猿は人間に近いからだ。では何故お尻を使ふのか。猿のからだは毛だらけだ。眞赤なお尻だけは毛が少い。だから女のお顔の代りにお猿のお尻を使つたのだ。

母親が夫の愛の遠のくのを恐れて、湯上り化粧寝白粉、それもりのびもいと云ふパツチリ百美人を常用した。申す迄もなく鉛含量が恐るべきだ。硫黄泉への道で一里下から顔が黒くなる程の鉛の含量だ。その鉛が皮膚から、特に湯上りの柔かくなつた皮膚からは容易に吸収される。それが乳汁に混つて子に及ぶ。その研究なのだ。

哺乳類でなくては都合が悪い。鉛を皮下に注射でもするならば、毛だらけの動物でいゝ。だが女のおしろひは皮膚にぬるだけだ。だからやはりお猿の赤いお尻をお化粧するのが理想的だつたのだ。

お猿のお尻のお化粧に二月三月浮身をやつして借、子を生め子を生めと、春の來るのを待ち兼ねて、動物園へ願書を出して種取りをする。幸にお化粧猿が妊娠すると氣があらくなる。手にかみつかれたり顔をひつかゝれたり鉛毒過ぎて流産とでも來れば、過ぎし一年は棒にふる。

「人間が使へるといゝんだがな。」

大學醫學部を出て、小兒科の助手三年、それから地方病院の小兒科部長五年、先づ二三年や三年節約さへすれば何とか論文製作専門になれる小金も貯金した。郊外に小さな借家住ひ、子供も三人目がおなかにある。その細君と夕飯後の相談なのだ。

「人間でなくてはやつぱりうまく行かないのですか。」

「あゝ、兎などでの仕事はすんだんだが、兎は毛ばかり生えてるから都合が悪いのだ。猿を使つたが、猿は一匹七八十圓かかるからな、今日の新聞にも女が一人死刑になつたがおしいものだ。」

學問のためだ、あれを實驗材料に出来るならと本氣に思つてるのだ。

「人を使ふとすれば、唯鉛の多いおしろいを毎日ぬるだけでせう。」

「さうさ、唯それだけなのだ。」

細君はヂツと夫を見つめた。

「鉛毒つて治るものですか。」

「そりや治るさ、役者なんかの様な重症のたつておしろいを全くやめて治療すれば治るんだから。」

「あなた！」

「うん。」

「私ぢや駄目？」

「え？」

「私バツチリを明日から使ひませうか。」

「……………」

「いつでしたか私新聞で見ましたわ、やつぱりお医者さんの奥さんが旦那様の研究のため、一身を捧げたつて。」

妻の頬は紅潮して来る。

「うんあつたね。」

夫は他人事の様^{さま}に氣のない返事だ。

「あなた、私だつてそれ位の理解はあるつもりよ。たとひそれで死んだつて私満足ですわ。夫は妻の熱心さに動かされた。」

「お前本気で云つてるのかい。」

「え、本気ですわ。一日も早く御研究が完成しなければ、第一困りますもの。もう半年分位しか貯金ありませんわ。」

「さうだらうな。」

「あなた、あなたは私がこれ程熱心になつて申し上げてますのに、まだ私をうたがつていらつしやるの。」

「いや疑つてなんか居やしないよ、お前の心はよく分つてるよ。感謝してる。」

「感謝なんて、そんな……」

「唯ね、僕の研究はお前一人を犠牲にしたのではすまないのだから。」

「私一人でなく誰を。」

妻はもう安らかに眠つて居る二人の子を見てホロリとした。

「子供達ぢやない。」

夫は狼狽して云つた。

「でも私に萬一の事でもあれば……」

「そりや大丈夫なのだ。それ程重く中毒させる必要はないのだ。」

「ではどういふのですか。」

ホツと安心して妻は夫を見た。夫は妻のお腹を一寸見た。

「……………」

「あなたは矢つ張り遠慮していらつしやるのだわ。私おこつてよ。」

「まアおき、犠牲になるのはそれなんだよ。」

夫は妻のお腹をあごで示した。

「え？」

「お腹にあるものなのだ。」

「まア……」

妻はゾツとして両手をおなかにあてた、その時もう八ヶ月になつて居る胎児が急に動いた。

「動いたわ。」

淋しい笑が妻の顔を一瞬通り去つた。二人は五六分黙つて居た。夫が急に投げ出す様に云つた。

「よさうよ、こんな話……」

「私考へて見ますわ。……けれどわたしが鉛毒になれば生れる子はいけなくなつてしまふのですか。」

「それを研究するのも一つの仕事なんだから。」

「ではためしにかけるとね。」

「まアさうだ。」

「……………」

おなかの子がしきりに動いた。妻は自分の身よりおなかの子の方が氣にかゝつた。ふと夫が自分よりも生れる子の方を矢つ張り重く考へてるのを思った。それが妙に淋しく思はれて来て、眼尻があつくなつて来た。

夫はホツトため息をもらした。

「やめようかな、こんな仕事は……」

夫の言葉が妻には福音に聞えた。

「外に研究の題目がおありになりました。」

「さア、あるかも知れないが……」

「半年しか日がなくて、なかく〜。」

「さうなのだ。だからもう研究なんかやめてしまはうかと思ふのだ。」

「でも……」

それは妻には堪へられない程惜しかつた。

自分の友達の夫で學位を持つて居る夫を持つて居る人などの事が胸に浮んだ。

あの夜の話はその後夫も妻も思ひ出しながらも話し合ふのをお互に恐れて居た。猿の實驗は猿が妊娠しないので全く絶望だつた。夫は毎日研究室へは行くが早く歸つて来て、子供と遊んでばかり居た。

お産がすんだ。上二人の女の子の次に男が生れたのだつた。母も子も肥立ちはよかつた。もう三四ヶ月しかかゝうして暮すお金はないと妻はそればかり心配して居た。妻が子に乳をふくませるのを目をすゑて夫は見つめて居るのを妻は感付いて居た。

……私だけ犠牲になれるならば……と妻は思ひつとけた。たうとう或夜妻は云ひ出した。

「あなた、坊やを牛乳で育つたらどうでせう。」

妻の心は夫にも讀めて居た、が妻を子より軽く扱ふ自分の心を夫はかくしたかつた。

「お乳は十分にあるぢやないか。」

「え、でも此子は丈夫な子ですから、牛乳でも育ちます。私色々考へましたと思ひきつて

鉛毒になつて見ようと決心しましたわ。私の乳を坊やに飲ませさへしなければいゝのでせう。そして私の乳を……」

妻ははたと言葉につまつた。誰の子に飲ませるのかその毒を……

「やつぱり駄目ね、自分の子でなければ……」

赤子を抱えて居た夫は急に元氣になつた。

「考へた、さうだお前の乳は兎の子か犬の子に飲ませればいゝ。」

「まア、さうなの、それなら……」

が吾子のための乳を兎や犬の子に呉れるのはいゝ氣持ではなかつた。妻の心とは無關係に夫は有頂天になつて喜んだ。

「ではさうしよう。それさへお前が承知して呉れ、ば、僕の研究は一二ヶ月で完成するんだ。」

夫は書齋へ行つてパツチリと百美人を持つて來た。

「では氣の毒だがたのむよ、牛乳はお前の飲むのがまだ一合残つてゐるね。」

夫は勝手から牛乳を持って来て、哺乳瓶に牛乳をうすめて砂糖を入れた。

「お前お湯へ行つておいで、此おしろいを持つて。」

妻は淋しい心で立ち上つた。

「顔から襟へなるべく濃くつけるんだよ。濃い程いゝ。」

「はゞ。」

妻は勝手口から出て行つた。夫は眠りかけてむづかる子の口へ、哺乳瓶の口をあてがつて見た。案外子は乳をうまく飲んだ。

「うん、利口な坊やだ。」

夫は赤子をソツと蒲團に入れて哺乳瓶を持つて居た。

一時間程して妻は歸つて來た。湯上りにのびのびのおしろいをつけた妻は結婚當時の様に美しかつた。夫はそれをほめようと一寸思つたが氣がとがめた。

「感謝するよ。坊やは大丈夫育つよ。今晚乳を飲んだよ。」

「まあさう……、でも可哀さうね。」

「そんな事云つてお前ねぼけて乳をのませるなよ。」

「大丈夫です。あなた、私何ですかおしろいをつけ出した時には、悲しくて涙が出ましたけれど、今は自分が大變えらくなつた様な氣がしますわ。」

「ほんとにえらくなつたのだよ。いづれ今に今夜の事も笑ひ話になるよ。」

二人は顔を見合せた。

「さうよ。私お湯屋で自分ながら見違へましたわ。」

朗らかな、なごやかな氣分が二人を包んだ。

三ヶ月過ぎた。パツチリのお化粧の妻の乳は鬼の子を殺した。それを夫は解剖したり顯微鏡標本を造つたりして、「有鉛顔料を使用せる母乳の乳兒に及ぼす影響」と云ふ論文を完成したが夏に入つて夫妻の大事な子は消化不良を起した。夫はすぐに子を入院させた。乳兒の消化不良に最も効果のある母乳は今用ひられなかつた。病院へ雇はれて來て居る乳母の乳を子はどうしても吸はなかつた。兩親の焦慮も甲斐なく子は生後半年で死亡してしまつた。夫妻は亡兒の枕頭に一言もなく頭を垂れて居た。

グレタ・ガルボが入つて来た。

「山口先生、申上げ様ありません、さぞお力落しでいらつしやいませう。お子様はほんとうに先生の御研究の……」

その時氣狂の様に立ち上つた妻は、グレタ・ガルボを室からつき出した。そしてドアを手早くしめてから、聲を立て、泣きながら夫にしがみついた。

「すみません、私が此子を殺したのです。私がい儘な考へを起したからです。」

と云つたかと思ふと、今度は亡兒を抱きあげた。

「坊や、許しておくれ、許しておくれ、此お母さまだけうらむならうらんでおくれ、お父さまがお悪いんぢやない、私ですお母さんです！」

妻は子を抱き下して、床に泣き伏してしまつた。夫ははふりおちる涙をズボンの上に雨と降らして居た。妻がやゝしばらくして泣きやんだ時、夫は靜かに云つた。

「もう悲しむのはやめよう。此の子はおれ達の愛だけを知つて死んだのだ。お前もおれも此子を決して愛し足りなくはなかつたのだから……」

がその言葉は夫には勿論妻にもしつくりと胸に沁みなかつたが、二人はなき子の所謂冥福だけは祈る氣分になる事が出来た。

眼科學教室

—

「先生。」

眼科の外來診察室から醫局への廊下に出た山崎醫學士は立ちどまつた。小さき足どりで大きな病院のオーバースユウを持ってあましてグレタ・ガルボが追ひかけて来た。

「何ですか。」

藝術家と云ふ通稱を貰つて居る山崎は落着いて女を見た。

「あの失禮ですが今度蒲田へいらつしやる時一度お供させて戴けませんでせうか、私一度もスタヂオを見た事ありませんので……」

松竹の醫學顧問になつて居る山崎は、和製グレタ・ガルボでポツとする様な事はなかつ

た。

「承知しました。何なら今日午後行きますが。」

「まア、では是非。何時頃おでかけになりますの。」

「大抵二時頃でせう、蒲田から迎への自動車をよくす事になつて居ます。」

「では先生その頃又参りますから。」

「どうぞ。」

山崎は東京中の醫學部で噂の種になつて居る此女に對しても、路傍の人に對すると同様な冷静な態度がとれたのを内心得意だつた。

グレッタ・ガルボはすぐに病院の玄關へ引き返した。二時迄にはまだ三時間ある。美装院へ行く餘裕があるのだ。

「山崎、たうとう今度は君にモーシオンをかけ出したな、グレッタ・ガルボ……」

山崎の後について醫局へ入つた同僚が云つた。

「あは、モーシオンか。然し無駄だよ。」

「さうか。もつとも君は蒲田を、自由にあるいて居るのだからな。」

「さう云ふ譯でもないが、あの女にはモーシオンはかけられないよ。」

「どうかさうありたいものだ。何しろ君は藝術家なのだからな。」

山崎が藝術家と云ふ通稱をもらつたのには相當に眞面目な根據があるのだ。眼に關する美に就いては恐らく山崎以上の人は今日の日本にないだらう。瞳孔の大きさ、眉毛と眼瞼の關係、まつ毛の長さ、目の色と白粉の色との關係等に就いては東西古今の文獻や繪畫彫刻に通曉して居る。然も彼は彼自身の美感を根據として眼に就いての美の標準を立て、居るのだ。

従つて彼は彼自身の美に近づかせるために眼の整形手術の多くを發表して居る。恐らく彼が眼の美に關する論文を書いたならば、醫學博士と文學博士との二つの學位を何處の大學で授與するに躊躇しないであらう。冷やかな美、凄惨な美、モダンな美等によつて人氣を得て居る蒲田の女優は、殆んど彼の手術によつてその人氣を獲得したと云つていゝだらう。

今日は山崎は蒲田の幹部會議に顧問として列席する事になつて居るのだ。

午後の二時病院の玄關から山崎はグレッタ・ガルボを帯同して美しい自動車で出發した。通

りかゝつた看護婦達は一樣に嫉妬のまなざしをグレタ・ガルボに注いだ。實際山崎のオットリした藝術家風の態度は、此病院の看護婦の誰をも引きつけて居た。況んや彼が誰彼の區別なく女達に平等に振舞ふのが尙更女達には強い刺戟として働くのだつた。

一通りの世間話以外グレタ・ガルボも山崎に對して云ひ出せなかつた。さう云ふ世間話でも山崎の常識の豊富さは遺憾なく發表されて居た。

蒲田に着いてからも山崎は同じ態度で、グレタ・ガルボを女優に紹介して、スタジオに彼女を残して自分は會議に列席した。

二

幹部會議はトーカー問題であつた。純然たる目の藝術として發達して來た映畫が、今は目ばかりでなく聽覺の藝術をも加味せんとして居るのだ。

かうなると山崎の専ら關係して居た目の美に就ても問題が複雑になつて來た。最も重要な點は俳優の悲しみを現すシーンにある。今迄泣く涙を映すには、最も効果的なりスリンを目にさ

してから大寫しにする事が出來た。トーカーとなると、それが今迄通りには行かないのだ。自然に涙を出す方法を講じなくてはならないのだ。

涙の美をどうして簡単に造り出すべきかが、山崎の今日からの研究題目となつたのだ。

「一つ工夫して見ませう。」

彼は希望をもつてそれを引き受けた。

山崎は夕暮の蒲田を又社の自動車でグレタ・ガルボをつれて東京へ歸るのだ。

「涙をいつでも、必要に応じて出す様にする事を研究するのです。」

自動車の中で山崎はグレタ・ガルボに話した。

「トーカーになるとさう云ふ必要も出來て來るでせうね……實驗をなさるならば私でよろしければいつでも上ります。」

「或はお願いするかも知れません。」

看護婦にたのめば誰でも喜んで實驗臺になつて呉れる自信を山崎は持つて居たが、それが噂の種になるのを山崎は好まなかつたので、グレタ・ガルボが一番當り障りない様に思はれた

のだった。

その夜山崎は圖書室へ入った、涙に關係のある文獻の勉強を始めたのだ。一週間程して山崎の頭の中には色々の方法が思ひ浮ぶ様になつた。

第一は誰でもが氣がつく催涙瓦斯の利用であつた。山崎は先づ型の如く兎を使つて實驗した。催涙瓦斯の使用法を種々に試験した。實際兎は望む時に望む量の涙を分泌した。涙の分泌に伴つて涙管が擴張するのをも知る事が出来た。涙腺が刺戟されて涙の分泌が増加しても、それが大部分涙管を通つて鼻の方に流出するのだ。

涙の美しさは目のうるみと涙が目からあふれ出して頬を傳はる所にある。涙が鼻の方に集つて鼻水となつて出るのは、むしろ涙の醜さなのだ。

山崎は涙腺を十分に刺戟しながら、涙管の方をあまり擴張させない工夫のために一月近くの日を過して、やうやく成功した。

動物試験に於て成功する事は普通人類に於ても八分の成功を期待する事が出来るものだ。山崎は十分の自信をもつてグレタ・ガルボの來るのを待つた。

來た彼女は。山崎は彼女を小さな實驗室に入れた。十分に照明をはかつてから、十六ミリの撮影機を用意して實驗にかゝつた。勿論催涙瓦斯を盜賊に利用する様に、液體の形でピストルで發射する警視廳流の方法はとれない。と云つて、室内を催涙瓦斯で充滿させてしまつては泣くべからざる俳優がなく結果になる。此點を十分考へて山崎は必要な瞬間に突然瓦斯が當事者だけの目に及ぶ様に床から細いゴム管を出して、それを靴下からパンツを通して襟許に開口する様に工夫した。

「ではお願ひしますよ。先づあなたはその机に倚つて本を読む。本の内容が段々と身につまされる。遂に本の上に顔を泣き伏せる。一二分後あなたが顔を上げる。その時に撮影機の方へ正面を向けて下さい。勿論唯一人で讀書してゐるのです。では始めますよ。」

グレタ・ガルボは山崎が意外と思ふ程上手にやつてゐる。遂に女は本に顔を伏せる。山崎は撮影機を廻しながら、今！と思つて催涙瓦斯を送つた。

その時緊張した山崎の目と、撮影機のフィルムに残つたものは何だつたらう。グレタ・ガルボはしばらく本に伏して居た。もう顔を上げる頃と山崎が期待して居るのに彼女

はまだ顔を上ない。そればかりでない、彼女の肩の筋肉は甚だしく緊張して來るのだ。そして彼の肩が波うつた。

「顔を上げて！」

と待ち兼ねた山崎が云ふと全く同時に、彼女の肩は動いた。そして頭が本からはなれてしばし中空に居た。深く胸一杯に彼女は空気をすつた。いかにも眞にせまつては居る。が次の瞬間に彼女の頭は天から落ちる石の如く本に落ちた。

ハクシヨン！ 惨たる光景だ。後はくさめの連続だ。山崎は撮影機を捨て、彼女に近づいた。彼女は涙と鼻汁に浮いてくさめをし續けて居るのだ。

「しまつた、しまつた。」

山崎は大急ぎで又彼女をはなれて催涙瓦斯の口をしめて、再び彼女に近づいた。やつと落着いた彼女は、山崎の出すハンカチで顔中を拭つた。

「あゝ、先生。」

彼女の白粉は跡方もなくはけ落ちて、右の頬にある薄いあざが見えて居た。彼女の顔を山崎

は呆然として見つめた。彼女の手の早さよ。ハンドバックからコンパクトが出される。刷毛が顔一面に動く。

「随分ひどいわ、先生も。私をすつかりおもちやになさるんですもの。」

と云ひながらも左程グレタ・ガルボは山崎をうらんでは居ないのだ。すべてを女性が男性に暴露した時には、女性は心からの快感を味はふものだ。

「うつかりしたんですよ。兎で實驗した時には、兎はくさみをしないので、うつかりしたんです、許して下さい。」

「えゝ。いいのよ、たとひ計畫的に先生が私をかうなさつたとしても、私先生をうらみなど致しませんわ、私心から、うれしいと思ひますわ、わたし先生になら、もつと／＼ひどい目にあひたいわ。」

彼女はさう云ひながら口紅を濃くぬり直して居た。

「實際うつかりしてゐたのです。催涙瓦斯が鼻の粘膜も刺戟するのをうつかり忘れたので。」

「いゝのよ先生どうか、色々の事をすつかりお忘れになつて、私をいちめて下さらない。」

彼女の目は火と燃えて居るのだ。だが山崎の心は水の如く静かになつて來た。どうして催涙瓦斯の鼻粘膜に對する刺激を除去すべきかの研究心が彼の心に湧き立つて居るのだ。

三

鼻粘膜を麻痺させる問題は山崎にとつては何でもない問題なのだ。コカインをあらかじめ鼻粘膜にぬつて置きさへすればいいのだ。唯問題はそのコカインがどの位の時間効果を保つかだけである。コカインをぬるとすれば撮影の都合のいい區切りにやらなくてはならない。それが必ずしもいい區切りがあるかどうかは、シナリオによつて自ら異つて居る。だからなるべくコカインを永くきかせて置く必要がある。それには鼻粘膜からコカインが出来るだけ吸収されないために、鼻粘膜を貧血させて置く必要がある。アドレナリンをぬつて置けば粘膜は貧血する。これだけの考へが浮んだ山崎は、もう兎を使ふ事の出来ないの思つた。矢張りグレタ・ガルボをたのむしかないのだ。

數日後からグレタ・ガルボは毎日午後山崎の研究室へ來た。

「何分お願いします。」

山崎は學者らしい冷靜さをいつになつても失はない。

「そんな事もうおつしやつてはいや、私おこつてよ。」

彼女は實際かうして實驗臺になるのを無上の光榮と思ふのみならず、女性としてのうれしさに陶醉して毎日通つてくるのだつた。自分以外の女性を決してこれ程山崎から重要視されないのを意識しながら。

山崎はコカインとアドレナリンとの配合を工夫しながら、それを彼女の鼻粘膜にぬつて十分二十分、三十分後に綿棒で鼻粘膜を刺激して見るのだ。

「どうです、くさめが出さうですか。」

「いえ、何ともないわ。」

顔と顔とが近づいてお互のいきが頬に感ぜられるのだ。それがどれ程彼女の全身を刺激した事か。

一週間程で研究は完成された。コカインの濃度、アドレナリンの使用法等が山崎の研究ノ一

トに記入されて何分迄有効かゞ決定された。
彌々今日は本試験だった。

「今度はうまくやります。」

「え。」

グレタ・ガルボは鼻粘膜に薬をぬられた。

「では先日の失敗の時と同じシーンにしませう。」

山崎は撮影機によつて催涙瓦斯の栓に手をあてた。グレタ・ガルボは机によつて、本を讀み出した。山崎は緊張してそれを見つめる。遂に女は本に顔を伏せた。山崎は催涙瓦斯を送つた。なかく女は顔を上げないのだ。たうとう山崎は待ちきれなくなつた。

「顔を上げて！」

女は顔を上げたが、山崎の期待に反してニコ／＼笑つて居た。

「分つてよ、先生。もう私こらひきれないわ、そんなにいつ迄も女をじらせると罪よ。」

女は涙一滴もなく朗らかに山崎へ向つてとんで来て両手を山崎の肩にかけた。その艶笑の姿

に山崎はけいんに見つめた。

「催涙瓦斯を今度はお使ひにならないのよ。私分つてるわ。」

「いえ決して。」

山崎はそれでも思つて瓦斯の栓をあけて彼女の襟に自分の目を出した。涙とくさめの洪水だ。山崎は狼狽して瓦斯の栓をとじた。そして涙をふきながら女を見た。女も合點の行かぬ顔をした。その時山崎の頭を矢の如く通り過ぎたものがあつた。

「さうか。さうだつたな、コカイン中毒者には此瓦斯はきかないのだつたな。」

二人は泣き笑ひの顔を見合せた。

耳鼻咽喉科學教室

「一番お客の多い科は耳鼻科だ。」

「何故。」

「一人で五人分の病氣をするからさ、耳は二つ鼻は二つ咽喉は一つ合計穴が五つある。」

「眼科は目玉二つで二人分、婦人科は一つかな……皮膚科は穴がないぞ。」

「皮膚科の谷山教授が此間往診したんださうだ。」

「皮膚科だつて往診するだらう。」

「華族さんへだ。行つて見ると赤ん坊が濕疹になつてたさうだ。一目見たら濕疹と分つた。」

診察がすんだら手洗が出た。先生すまして手を洗つて歸つて來たつて事だ。目を洗ふ方が木當なの。」

と云つた調子の醫局テーブルスピーチだ。

「どうも近來高木の奴馬鹿にへビーをかけてるぢやないか。朝から晩迄あの嘔の子と首つ引きだぜ。」

「おれ達の科の研究はもう行きづまりなんだから、嘔でも研究するしかないからな。」

「それにしてもあいつ毎日何をしてるのだ。」

「笛を吹いてるぜ。」

「笛？」

「うんもう五六十本笛を造つた様だ。その笛をあゝの嘔の子の耳許でピー／＼と代る／＼吹いてるのだ。」

「一體あの嘔はどこから拾つて來たのだ。」

「本所とかで拾つて來たんだ。迷ひ子だか捨子だか分らないが、とにかくア／＼云つて往來をあるいて居るのを見つけて、警察へ届けたんだが、引取人がないと分つて、たうとう自分で育てる氣になつたのだ。」

「物好きな男だな。」

「此頃ではすつかり自分の子見たいに抱いてねるつて噂だよ。」

「初のうちはしきりに中耳の検査をして居たが、結局中耳は完全に、内耳の欠損してゐる事にきまつたらしい。」

「内耳の欠損ときまつては、何の研究材料になるんだらう。」

「そいつが分らないのさ。生れ付内耳が欠損してゐるなら聾にきまつてる。その聾のために嘔になつてゐるのだから、教育は例の唇話法によるしかないがな。」

「ところが高木の説では唇話法や手つき手まねで聾啞を教育するのは、耳鼻科の醫者に對する絶對不信用を發表するものだから、あくまで唇話法は排斥すべきだと、恐ろしい勢ひだぜ。」

「高木らしい考へ方だ。」

「若し高木の考へる様に内耳の欠損のために起つた嘔が、音をきく様になればまづノーベル賞金だぜ。」

「さうだらうな、若し間違つてさういふ事になつたら、恐らく高木は名譽だけ専有して賞金の方は醫局へ寄附するだらうな。」

「勿論だ。高木をつれて来てその決議をして置かうよ。」

「賛成！」

其處へおなじみのグレタ・ガルボが顔を出した。

「やあグレタ・ガルボ嬢一杯やり給へ。」

ビールのコップを持たせられた女は、元氣のいゝ若い助手達の氣分に混つた。

「えゝ、御馳走になるわ。今夜はどなたかの御誕生ですか。」

「おれの、誕生だ。」

「うそだぞ僕のぞぞ。」

夜の八時の醫局がグレタ・ガルボ登場で忽ちにはしやぎ出した。

「では高木のノーベル賞金の決議をやらう。立會人はグレタ・ガルボ嬢だ。」

「賛成！」

「一體何ですの。」

「今に分るさ。あゝ恰度いゝグレタ・ガルボ嬢、高木君をよんで来て呉れ給へ。」

「高木先生を？あの武さんの室ですか。」

「さうだ、嘔の武さんの室だ。」

「では行つて來ますわ。」

女はビールを飲み乾して出て行つた。

三疊の物置小屋が武さんの室なのだ。四號といふ札がかゝつてゐる。何處の病院にも四號はない。縁起をかつぐからだ。と云つて一二三五では病院として體裁が悪いから、物置小屋を四號として居るのだ。

「高木先生。」

グレタ・ガルボがドアを打つてから聲をかけた。

「おはりの。」

女はドアをあけた。武さんは七つか八つで榮養のいゝ色白の子だ。特に目がいい。ベッドにねころんで、高木に買つてもらつた繪本を見てゐた。そのベッドに腰かけて高木は何十本か數へきれぬ程の小さな竹笛をいぢつて居た。

「先生、是非醫局へおいで下さいつて御言傳です。」

「さう。」

と高木がベッドから腰を上げた。それを知つて武さんはチツと高木を見た。實に人なつこい眼だ。

「一寸行つて来るよ。又すぐ来るから。」

啞の子は淋しさうな眼で高木に答へてから、グレタ・ガルボを見た。不具者特有の陰惨な顔になつて女をうらめしさうに見つめるのだ。

「あらッ、私を憎んでるわ。」

高木は武さんを見た。

「すぐ来るからね。眠くなつたら寝ておいで。」

高木の言葉で武さんの顔は幾分柔いだ。グレタ・ガルボは恐ろしくなつて室を逃げ出した。

高木は黙々として哲學者の様な顔で醫局へ向つた。グレタ・ガルボは高木を今夜程尊く見た事がなかつた。

「うん、高木、今重大問題が起つたのだ。」

「何だえ。」

高木は酔ひかけて居る同僚を見回して笑ひかけた。グレタ・ガルボは高木の後に小さくなつて居た。

「君の研究に就いてだ。内耳の欠損のための聾啞が音をきゝ物を話す様に迄なつたならば、これは確にノーベル賞金ものだ。だからそのノーベル賞金が來たら、君はその名譽を專有するのは當然だが、賞金だけは醫局に寄附する事を今皆で決議したのだ。だから君に之れを強制承諾をさせようと云ふのだ。立會人は……あゝ、君の後に居るグレタ・ガルボ嬢にたのんだのだ。どうだ不承知か。」

「あはゝゝ、まア一杯のませろよ。」

「いや承知しないうちはのませない。」

「ぢやア承知した、正に。」

「それでよし、グレタ・ガルボ嬢、君が證人だよ。」

「承知しましたわ。」

「やれ〜これで一安心だ。」

一同コップを高くあげた。

「高木君のために。萬歳！」

「萬歳！」

「さアかうきまると、高木の研究は高木一個人に限る問題でなくなつた。醫局全體の大問題だ。高木どうだ成功しさうか。」

高木は比較的酔つて居ない同僚に向つて云つた。

「可能性は十分あると信じて居る。」

「然し内耳が欠損してる場合だよ。」

「その點なのさ。内耳が欠損してると云ふのは、在來の検査法では、内耳が欠損して居る結論に達しても、新しい特別な検査法によれば内耳の一部は残つて居るかも知れないと僕は思つてゐるのだ。」

「ふうん。」

誰も賛成らしくない。高木の頬がほてつて來た。

「音と云ふものは、空氣の波動だから、ちがつては居るが、光線の方を考へて見ると、光線は要するに電磁氣波だらう。そして、その波長はラヂオの様に何百米のものから、目に見える光線の様な短いものもある。一層短くなれば紫外線だし、極端に短いものはレントゲン線やラヂウムの線がある。目に感ずる線の外に色々の波長の線が今日発見された。普通寫眞ではうつらない遠方のものも、赤外線寫眞にうつる。霞ヶ浦の上空から名古屋が寫眞にうつるのだ音だつて吾々の耳に音として聞えるのは或限られた波長のものだけだが、それより長い波長又は短い波長の波動がある事は確實だ。だから例へば赤外線寫眞の發明の様に、吾々の耳には音として聞えない波動を吾々の耳にきこえる波動になほす事だつて不可能ではない。

雙啞は普通吾々が音として感ずる波動に對する内耳は完全に缺損して居るとしても、音と感じない短い又は長い波長の波動を感ずる内耳は残つて居るかも知れないだらう。僕はさう云ふ信念から研究を進めるのだ。だから可能性……成功の……は十分あると信じて居るのだ。」

高木は強い信念を初めて同僚の前に發表したのだ。

「なる程、理論的には面白いな。」

「いや理論ぢやない、實驗なのだ、僕の研究は。」

ビールの酔が一同大分さめた。高木はいつの間にか室を出てしまつた。

「なか／＼頭はいゝな。」

「いや實際高木の考へは正しいよ。」

「ノーベル賞金大丈夫だ。」

グレッタ・ガルボは呆然として高木の強い信念にまだうたれて居た。

三

高木の研究の熱は、學問に對する眞劍の努力のみではなくなつた。啞の子に對する深い愛が彼の研究心に薪となつて熱を高めて來た。それを知つたグレッタ・ガルボは啞の子に毎日の様にお土産を持つて訪ねて來た。啞の子は高木を父と慕ふと共に、グレッタ・ガルボを母として慕つて居る。

高木は調子の高い或は調子の低い笛を造つて啞の子の耳許で吹く。遂に高木は極度に調子が

高くて自分には殆んど音として聞く事の出来ない笛を造つた。それを或夜啞の子の耳許で吹いた時、啞の子は未だかつて見せなかつた喜びの表情で反應した。高木は續けて色々の笛を吹いた。啞の子は今度は少しも反應しない。又極端な高調の音が吹かれた時、啞の子は明かに反應した。そしてアー／＼と聲を立て、喜んだ。

高木は啞の子よりも尙一層喜んだ……矢つ張り豫想通りだ、すばらしく振動数の多い調子の高い、普通人の耳にはもう音として反應しない音を、此子は感ずるのだ……

高木は此結果に元氣づけられて、今度は電氣サイレンを造つた。神宮外苑の野球の開戦閉戦を告げるのが即ち電氣サイレンだ。ウウウーと低音から順次高音になり、一時笛が消えて再び高音から低音へ、遂に音が消える。あの高音の極一時音が聞えなくなる時の波動を啞の子は初めて音として感ずるのだ。

電氣サイレンの利用によつて遂に高木は啞の子が音として感ずる振動数の範圍を決定する事に成功した。

春の朝高木は又電氣サイレンをならして居た。其處へグレッタ・ガルボが來た。

「お早うございます。御研究は如何ですか。」

高木はうれしさを一心に押しかくして居る事が出来なかつた。

「たうとう此子は音をききましたよ。」

「まあ……」

「よく此子の顔を見て居て下さい。」

高木は電氣サイレンをならした。低音から高音へ、そして音が消えた時、啞の子はとび上つて喜んだ。そしてサイレンに耳を近づけてアー／＼と叫んだ。

「今聞こえて居るんですよ。私達には聞えない高い調子だけ此の子はきくんです。」

「喜んでますわ。」

グレッタ・ガルボが菓子を出して啞の子に呉れた。啞の子はその菓子を手にとつて、グレッタ・ガルボの胸に顔を押しつけた。と、すぐにはなれて今度は高木の頸へしがみついた。

「うれしいんですよ。」

「どんなにうれしいでせう。」

二人は顔を見合せた。

高木の手まねで啞の子は菓子を持って病院の庭へ出て行つた。その後について高木もグレタ・ガルボも庭に出た。

「啞が音を聞く事だけは確になりましたよ。」

高木の喜びは啞の子への愛と學問の研究との満足のオーケストラだ。

「音をきくと分れば、話も出来る様になりますね。」

「その點だけです。僕はまだその點のいゝ考へが浮ばないのです。」

「でもいつれそれも……」

啞の子が高木のそばへ來た。そしてアーーと云つて砂に繪をかき出した。二人はその繪を見つめた。繪は大きなビルディングらしい。そして次に人形らしいものがかゝれた。高木が笑つた。

「よし、分つた。つれてつてやる。」

高木は笑ひながらグレタ・ガルボに云つた。

「あなた分りますか、此の子の繪が……三越につれてつて呉れと云つてるのですよ。今朝は暇だからつれてつてやりませう。」

「さうですか、では私も御一緒に。そして何か買つてあげませう。」

「どうか。……此子はあなたをお母さんと思つてるんですよ。」

とうつかり高木が云つた。

「先生をお父さんと思つてますつて。」

グレタ・ガルボは意識的にかう云つて、頬を染めた。

「あはー。」

高木は笑ひにまぎらせた。それから二人は啞の子をつれて三越へ行つたのだ。そして入口にその日から置かれたロボットに三人は見とれてゐた。ロボットは物をしやべつた。それを聞きながら高木は、啞の子を憐れんだがふとその瞬間高木の頭には天來の聲が聞えた。それが高木のノーベル賞金を實現する事となつたのだ。

聾啞學校の教室で教師が聲を出す。その聲はロボットの原理で忽ち啞にだけ聲える高調子の

音となつて生徒の耳に入るのだ。そして生徒は又特別に訓練された聲帯で、高調子に答へる、それが又低調になつて先生の耳に入つて来る。聲帯救護器としてノーベル賞に値した高木機は實に啞の子武さんに對する高木の愛の結晶だつたのだ。

内 科 學 教 室

癌が癒るか。

「癌と云ふものも癒りますね。」

と内科の醫局を訪ねて來た洋服屋の親父が云つた。

「馬鹿な事云ふな癌が癒るものか。」

頭下しにどなり返した。

「お醫者さんはみんなさう云ふから……だがほんとに癒つたんです。私のおふくろです。」

「君のおふくろつて、二年前前に外來でうちの先生にみてもらつた婆さんか。」

「え、さうです。先生も癌とおつしやつたので、あれから七八人の博士さんにみてもらったのです。どなたも癌とおつしやつたのです。エックス光線でも癌ときめられました。癌ときまつてはもう仕方ないと思つて、年寄のいふなり次第にして居ましたが、山藤のこぶを煎じて飲めといはれて、それを煎じてのませました。そしたらばすつかり癒つたのです。」

「一時偶然にいゝ方に向いたのさ、それも自分の苦しみが幾分なくなるつたよけだ。いづれは又悪くなつて死ぬよ。」

「ところが今朝こちらの先生のお宅へ上つてみていたよいたのです。そしたら、なアる程癌は癒つてると、おつしやいました。」

「そりや先生、じょうだんをおつしやつたのだ。」

「然し、もう大丈夫だ、引きうけた、と先生がおつしやつたさうです。」

「もしほんとにさうならば、そりや癌ぢやなかつたのだ。」

「七人も八人も博士さんが癌だと明言なさつたのですよ。」

「だからそりや誤診だ、診断がまちがつてたのだ。」

「どうして診断が間違つてたとおつしやるのです。」

「その證據に癒つたぢやないか。」

「では癒らないのが癒ですか。」

「さうさ、癒は癒らないのだ。」

「變ですな。」

「變な事はないさ、癒が癒つたといふのは、みんな誤診なのだ。だから癒を癒す名醫になりたければ癒でないのを癒だといへばいゝのだ。」

「さうすると癒らないのが癒とお醫者さんはきめてるんですか。」

「ちやうど。」

「ではお醫者さんは癒を癒さうとしなうのですね。」

「まアさうだ。」

「では癒せないへお醫者は、癒でないものを癒にするんですね。」

「さうだ。へお醫者は癒でないものを癒にするのだ。」

「然し、癒でないものを癒にすると、癒は癒る譯になりますね。」

「？」

「何が癒だか分らなくなつちやひました。」

「おれも分らなくなつたよ。」

「ほんとうに先生、癒は癒らないのですか。」

「くだいな、癒らないよ。」

「ではおふくろのは癒でなかつたのですか。」

「勿論癒ぢやない。」

「では藤のこぶは何を癒したのですか。」

「何も癒さなかつたのだ。」

「變ですな。」

醫局で二人の助手が話して居る。

「癌を癒せればすばらしいな。」

「夢見たいな事いふなよ、癌は癒らないから、癌ぢやないか。」

「そこなのだ。癒らないのが癌だときめて居るから、癌の癒る時が来ないのだ。」

「だつて癒す方法のないうちは、癌は癒らないのが當然だらう。」

「だから癌は癒るものだと言ふ信念を醫者が持たなくてはいけない。」

「治療法もないのに、癒ると言ふ信念は持てない。」

「癒り得るものだと言ふ信念を持たなくては治療法だつて發明されなぢやないか。」

「治療法もないのに、癒ると言ふ信念を持つのは迷信だ。」

「迷信？ 何故迷信だ。僕は迷信とは斷じて思はない。癌は必ず癒るべきものだ。現在不治

であるのは、我々の知識が不十分だからだ。」

「だから不十分の知識で癌が癒ると信ずるのは迷信だ、内容ゼロのナンセンスだ。」

「然しそんな考へ方をして居れば、いつ迄たつても癌は癒らないぢやないか。」

「然しやむを得ない。」

「己むを得ないではすまない。癌は必ず癌ると云ふ信念で研究しなければ駄目だ。」

「信念々々といふが君は癌は癒ると云ふ信念が實際あるのか。」

「勿論確固たる信念を持つて居る。」

「その信念の根據は。」

「根據？ 根據はない、唯さう思はれるのだ。」

「では迷信ぢやないか。」

「……」

「根據のない信念は即ち迷信だ。唯思はれる何となく思はれるでは話にならん。」

「ではきくが明後日は晴天か。」

「明後日？ 雨だ。」

「どうして雨だ。」

「もう降ると思ふ。」

「何故降ると思ふのだ、唯もう降る頃だと思はれるだけだらう。君の論法だと、君は迷信によつて明後日は雨だと思ふのだらう。」

「違ふ。おれは、餘り晴天が続くから、今迄の經驗上降ると思ふのだ、立派な根據があるのだ。」

「よし、では癌の話にもどらう。今迄不治だと思はれた病氣が醫學の進歩で今日不治でなくなつた例がいくらかもある。だからもうそろそろ癌の治療法が発見される頃だとおれは思ふのだ。だから癌は癒ると信じるのだ、どうだ降参か。」

「天氣と癌とは違つてる。」

「いや違はない。よし！ ではもう一つおれの信念の根據を付け加へるぞ。」

「信念が先で、根據が後では駄目だ。」

「そんな事はない。信念は意識の表面に現れて居る。その根據は意識下にあるのだ。だから信

念のよつて來る所を、検討して見て初めて根據を自覺するのだ。」

「まアその根據を云つて見給へ。」

「大自然は生物をなるべく長く生かして置く考がある。それが大自然の意志だ。だから大自然は時に失敗して癌などを造つたが、その反面には必ず癌を癒すものを、此地球上に造つておくに相違ない。俺はかう信ずるのだ。」

「なる程、洋服屋のおやぢは山藤のこぶが癌の妙藥だと云つたよ。」

「さうだ山藤のこぶだつて癌にきくかも知れない。實驗して見なくては分らない。なのに君等は癌は癒らないと頭からきめて居るから、山藤のこぶを輕蔑するのだ。何故實驗しないのだ。」

「實驗したつて無駄だと思ふからだ。」

「何故無駄なのだ、その信念の根據は、癌は不治だにあるのぢやないか。」

「まアさうだ。」

「癌は不治だ、と云ふ信念は君の所謂迷信だ、その迷信の土台の上に立つ、山藤のこぶが癌を

治さないと云ふ決論は間違つてゐる。」

「では君は山藤のこぶが癌を治すと信ずるのか。」

「實驗しなくては何とも云へない。」

「では實驗したらいいだらう。」

「勿論だ。」

「そして一生涯草根木皮虫鳥を實驗材料にし給へ。そして何は癌を治さぬ。何もきかなかつたと報告して呉れ給へ。」

「勿論それは重要な研究だ。」

「迷信打破の役だけにはなるよ。」

「何？」

三

グレタ・ガルボと山藤の癌學者の對話だ。

「どうです先生、御研究は。」

「きかないね。随分癌を殺したよ。」

「どうせ死ぬ人ですから仕方ないでせう。」

「ところがさうは行かないのだ。此薬は癌を治すと云ふ信念を持たなくては、研究が投げやりになるから、僕は山藤のこぶが癌にきくとかたく先づ信じた。だから患者は本當に癒ると信じて集まつて来るのだ。そいつが片つ端から死ぬのだから、氣の毒だ。」

「それはさうですね。一體人間はみんな癌になるときまつてるのぢやないでせう。」

「人間全體の一部だけだ、癌になるのは。」

「では何故癌にならないかを研究なさつたらばどうです。」

「なる程さうだな。癌になる原因の方は今迄大分研究されて居る。だが何故癌にならぬかは誰も研究しないのだ。」

「癌にならない理由が分れば、癌の豫防と癌の治療法も自然に分ると思ひます。」

「なか／＼君は頭がいい。」

「チベット人は痛にならないさうですね。」

「そんな事どうして君は知ってるのだ。」

「先日痛の座談會を社でしました。その時痛と云ふ各國語を調査しました。大抵の國には痛と云ふ字がありました。チベット語だけは痛と云ふ字を持たないのが分りました。」

「さうか……チベットは藥草の國だ。だから痛の豫防や治療になる藥草があるのかも知れない。いゝ事を教へて呉れたね、ありがとう。」

其處でチベット學者を醫者が訪ねたのだ。

「チベット語には痛と云ふ字がないさうですが。」

語學者は辭書を出して來た。

「痛と云ふやうな字は見當りません。」

「死といふ字は。」

「ありますよ。」

「結核は。」

「あります。」

「癩病は。」

「あります。」

「老衰といふ字は。」

「あります。」

「では伺いますが、チベットには藥草が多いのでせうな。」

「あゝ殆んど山川草木皆藥品です。」

「どうでせう、痛の治る藥草はないでせうか。」

「痛ですか。」

「ええ。」

「然し痛といふ字がないので、さう云ふ藥草があるかないかしらへようがありません。」

「なる程。」

「どうした。いよ／＼開業するか。」

「うん、やらうと思ふ。」

「看板は何とする。」

「勿論癌専門さ。」

「君の論文は癌には相違ないが、癌の治療法でないが大丈夫か。」

「そんな事は素人には分りはしないさ。とにかく僕は五年間癌に関する研究ばかりして居たのだから癌學者としては誰にもまけない自信がある。」

「その點は間違ひない。だが癌専門の看板をかけるのは十分考へてからにし給へよ。」

「うん。」

「君に診察して貰へば、みんな癌にされると思ひはしないだらうか。」

「僕はそのつもりなんだよ。癌専門の看板をかけてある僕の所へ、みて貰ひにくる者は大抵

癌ではないかと心配してくるだらう。だから第一診で癌の疑ひのある事を話すつもりだ。さうすると大抵の患者は満足する。癌でないかと思つて来る患者に、いきなり癌でないと云ふと、ホツと安心して喜ぶが、何となく物足りなくなるものだ。その上恐らく癌だといけないから、専門家にみてもらひなさいと何處かで云はれて来るのだから、第一診で癌にあらずと僕が云ふと、あの醫者奴おどかしやがつたと、前の醫者をきつとらむ。だから癌の疑がある者优先必ず云ふつもりだ。そして癌でないときまる迄に色々の検査をして先づ今の所は癌でない。だが油断すべからずと申渡すのだ。」

「本當の癌ならどうする。」

「矢つ張り第一診は癌の疑ありさ、そして第二第三診あたりで、注射を始める。何の注射でもいいのだ。どうも反應が少しある様に思はれる位に云ひ出す。大抵それで感付くよ。其處で癌ときめて癒して呉れとは決して云はせない。それには癌のアルコール漬を診察室に並べて置くのだ。あなたも此材料ですよと暗示を與へるのだ。」

「患者は逃げるだらう。」

「勿論終り迄食ひつかれてはたまらないからな。要するに癌に對する不安を利用する看板なのだ。勿論癌決定の大審院の役もするのだ。」

「なる程、案外はやるかも知れない。」

グレタ・ガルボから電話がかゝつた。

「私の叔父が癌になつたのですが、是非先生にみていたときたいと申しますが、御願ひ出来ませんか。」

「さうですか、叔父さんは癌と知つておいでですか。」

「それが分らないのです。うす／＼感付いて居るらしくもありませんが、自分では出来るだけさうでない様に祈つて居ると思ひます。」

「では今すぐおつれ下さい。」

叔父さんをつれて、グレタ・ガルボが来た。

「僕近く癌専門の病院を始めますよ。」

「さうですつてね。」

醫者は叔父さんを診察した。

「癌と云ふものは末期は別ですが、癌になるか、それとも癌にならずにすむかは、醫者よりも患者さんの方が自分で知つてるものです。あなたはどつちだと思ひますか。」

「……………」

患者は妙な顔をした。

「あはゝゝ、お分りになりませんか。」

「どうもそれが……………」

「では思ひきつておはなし……………」

「先生、一寸おまち下さい。どうも親父も癌でしたが、親父は酒をのみましたが、私は甘

黨で……………」

「では癌とはお思ひにならない……………」

「なるべくなら……………」

「さうでせうな。一寸小用をおとり下さい。」

醫 化 學 教 室

一

患者は診察室を出た。醫者がグレタ・ガルボと顔を見合せた。

「どう話させようか。」

冷血動物は冬眠と云ふ事をする。秋の末になると蛙類は、がまも殿様蛙も雨蛙も地底にもぐり込んで、これこそ本當の長夜の眠に就く。氣温の高低の影響が、直接體温に影響する動物を冷血動物と云ふのだ。だから冷血動物の體温は一定して居ない。鳥類、獸類、人類は、夫々一定の體温を保つもので、冬でも夏でも體温は一定して居る。だから冬になつて人類は氣温が低くなると、餘計に物を食つて、それを體内で燃して熱の發生を多くする。これが即ち温血動物なのだ。

冷血動物は冬になつて寒くなると體温も又下つて來るので、すべての化學作用が低温では行ひ難くなると云ふ一般の法則で、夏中の様な活潑な新陳代謝が行へなくなるので、活動が鈍くなつて、遂には眠つてしまふのだ。これを冬眠と云ふ。蛙はうつかり地表で冬に逢ふと冬眠を乗り越して凍死するから、秋の末となると本能的に地に穴を掘つて、地下の程よい温度の位置にいり込んで冬を待つて居る。冬で地表から寒氣が地中に迄及ぶ様になると冬眠に陥る。

醫化學教室の河邊學士は冬眠に於ける新陳代謝の研究をして居るのだ。實驗動物はあのグロテスクな蟄なのだ。冬眠中は動物は極度に低下した新陳代謝を行つて、かすかに生きて居るのだ。冬眠中は物を食はないのだから、當然新陳代謝は少くしなくてはならない筈だ。心臟がかすかに搏ち浅い呼吸が続くだけだ。が然し此心臟と呼吸の働きは、いくら浅く軽くあつても、矢張りエネルギーが消失するのだから、極輕微ではあるが、新陳代謝がある。

蟄は冬眠中は物を食はない、物を食はないで生きて居るためには勢ひ、自分のからだを消耗するしかない。生物のからだには生存するためには不必要な部分はないが、然しその必要度には違ひがある。心臟がなくては生きて行けないが、手足の肉などはなくても生きて行けるだらう。だから冬眠の間には蟄の體内で費消される部分が何處から始まるか、又次には何處に及ぶ

ものか、と云ふ様な研究が河邊の研究の中心なのだ。

二

河邊は教室の光のさゝぬ地下室に墓をたくさん飼つて居る。酒樽のなかに芋の様に墓を投げ込んで居るのだ。

河邊の研究は墓の冬眠にあるのだが、醫化學研究室だつて東京にあるのだから、大自然の春夏秋冬の影響をまねがれる譯にはならない。

グレタ・ガルボが醫界ニッポンの記者として、東京の各大学の醫學部に姿を現してから、もう半年近くなるから、河邊の研究室を訪れたのはもう六月近いのだ。東京の櫻は今年の四月の初旬に咲いたから五月の初めになると、夕暮の山の手の家の垣には、例の墓が現れてグーグーと鳴いた。

醫化學教室だつて六月になれば初夏だ、地下室の酒樽の中の墓は、春にめざめるのが當然だ。「御研究は如何です。」

春以來メツキリ評判をあげたグレタ・ガルボが河邊にきいた。

「遅々として研究の歩進まず、既に花散り葉櫻過ぎ躑躅のくれなゐを見る。噫？」

河邊が嘆聲をもらした。

「冬眠は？」

「それさ、もう一刻も油断が出来ないんだ。うつかりすると、重なり合ふんだから。」

「……」

さすがのグレタ・ガルボも紅くなつた。

「どれ永遠の冬を造るかた。」

河邊がノコノコと室を出た。女がその後に従つた。教室の地下室へ行くと、ゾット肌寒い。隅に四つ五つ酒樽がうすくらがりに置いてある。河邊は懐中電燈をてらしながら酒樽に近づいた。

「やア、もくもく動きやがる。」

グレタ・ガルボが酒樽をのぞき込んだ。氣味悪くいぼだらけの墓が疊々とかさなり合つてう

ごめいて居た。

「仕様がねえな。」

河邊は其處に置いてある大きな氷室から、大きな氷のかたまりをつかみ出して墓の酒樽にはふり込んだ。

「あら、先生墓がつぶれちまひますわ。」

「仕方ないさ。かうしてやらなけりや、目をさましやがるから。」

氷づけにして墓を冬にするのだ。墓は動かなくなった。河邊はどの酒樽にも氷を投げ込んだ。

「墓のおかげで、春になつてから、おれはしもやけが出来ちやつた。北極へでも行つてやるべき研究だよ。」

「本當ですね……。で先生いつ迄かうして眠らせておくんですの。」

「永久さ……。僕の研究の終る迄だ。」

河邊は酒樽の中に手をつき込んで、クチャク〜とぬかみそをかきまぜる様に、がまをかきまぜた。まくり上げた上腕迄が、がまのいぼにふれた。

「まア……」

ぞつとして女は逃げ腰になつた。

「君もかきまぜてくれないか。よう。」

河邊は樽の底からがまを一ツつかみ出して土間において、懐中電燈で照した。

「あは、こいつはよく眠つてやがる。」

それを手に持つて河邊は地下室の一方のドアをあけた。一坪ばかりの小室になつて居る。

「君も入るなら、入つてドアをしめてくれ給へ。」

グレタ・ガルボはこわくく小室に入つてドアをしめた。河邊がスイッチをひねつて電燈をつけた。

美しい氷柱が三本立つて居た。

「お、寒い。」

「勿論さ。」

と河邊は壁の寒暖計を見た。

「ちよつと攝氏零度だ。」

河邊は持つて來た墓の背中に油繪具で番號と月日とを書いた。それをボンと床に投げてから河邊は床をあちらこちらと見廻した。

「君十二と云ふ奴が居ないだらうか。」

さう云はれてグレタ・ガルボは初めて床を見た。自分の靴の周圍には幾つとなく墓がヂツとして居るのだ。

「君、ふんづけちやいやいけなよ。」

足尖から寒氣が頸筋へかけて上つて來た。

「あつた、あつた。」

女の恐怖などには全く無關心に河邊は一匹の墓をつかんで、室の隅の小さな机に向つた。

「あつ、いけねえ、ふんぢやつた。」

と云つて河邊が足を上げた時、グツと音がした。

「十二號か。死ぬなよ。」

河邊はしやがんで、十二號の背をつゝいた。女は一步も動けなかつた。河邊は腰をのばして机によつた。

「來て見給へよ。」

「え。」

すまじきものは官使ひだ。醫學新聞の記者になつてゐるばかりに、この墓の中をグレタ・ガルボはあるいて行かなくてはならないのだ。

河邊は机の上に一枚の板をのせて、墓の白い腹を上にして四足を釘で板にうちつけた。メスとピンセットで墓の腹がひらかれた。

「あつ忘れた、目方を計るのだつた。」

腹がきられて腸がその切口から垂れ下つて居るまゝ、河邊は小さな臺坪に墓をのせた。

「君、失敬だが、外の墓の目方を一つ／＼計つてくれないか。そして此表にかき込んでくれ給へ。」

目方を計るのは何でもないが、このいぼだらけの墓を手づかみにするのが、女は恐しいのだ。

「先生、失禮ですが私……」

「何だ小便が出たくなつたのか。」

え、とも云へなかつた。

「それとも外に……あゝ氣味が悪いんだね。では此れで足をぶら下げるさ。」
大きなピンセットを河邊は出した。

「……」

「勇氣を出してやつてくれ給へ。君を實驗動物にした奴さへあるぢやないか。」

「では、致しますわ。」

女は仕方なく腰を曲げて一匹の藁の足をピンセットでつまんで持ち上げた。案外重かつた。
「番號を間違へない様にたのむよ。」

河邊は腹をきつた藁から肝臓を出して目方を計つた。しばらくは二人とも無言の行だ。

三

河邊はビール瓶を研究室の机の上に立て、瓦斯で焼鳥をして居る、竹ぐしに肉つ切れや臓物をさして、醬油をつけて焼いてかぢつてビールを飲んで居る。

グレタ・ガルボが入つて來た。

「よう、來たのか。いゝ所だ。焼鳥で一杯やつてるのだ。」

「まア。」

香ばしい臭が室一杯にひろがつて居る。河邊は一本食つては又竹ぐしにさした。

「私お手傳ひ致しませうか。」

皿の上の肉や臓物を女は竹ぐしにさし始めた。

「御研究の方は。」

「うん、なか／＼面白くなつて來たよ……どうだ一杯あげよう。」

河邊がコップを女に渡してビールをついでやつた。

「食つて見給へ、なか／＼うまいよ。」

女も一くし食べた。かるくて柔かくて實にうまかつた。

「どうだ。」

「おいしわね。」

「そりやうまい筈さ。鳩だからな。ビタミン研究につかつた鳩なのだ。」

「さう、鳩？ 私初めてよ。」

女は又竹ぐしにさしては火にのせた。

「例の冬眠の研究はねえ……思ひがけぬ面白い結果になりさうだよ。冬眠中先づ費消されるのは、云ふ迄もなく脂肪組織だが、次には筋肉だよ。それから肝臓とか腎臓とか云ふ目方の重い臓器だ。其點は豫想の通りなのだ。普通の冬眠では實質的の臓器が幾分犯される程度で春が来るらしい。」

女は焼鳥の焼けたのを河邊に出してビールをついだ。

「や、ありがと……ところが僕はその上に人工的冬眠を繼續させてるんだから、臓器が大分犯されて来る、が墓は冬眠のため極度に體質の消費を節約して居るのが確實だ。心臓を搏たせて血液循環……それも極微弱だから……と浅い呼吸だけしかやつて居ないのに、その生活現象

に必要な體質消耗よりも、肝臓や腎臓の目方の減じ方がどう計算しても大きいのだ。と云つて體質の減少の方は、生存現象だけの程度しか現れて来て居ない。どうも妙なのだ。」

河邊がビールをのみ込んだ。

「ではその肝臓や腎臓の消耗はどうなるのです。」

「其處だよ。で僕は一月ばかり見當がつかなくて五里霧中だつた。がやつと分つたよ。」

「お分りになつて？」

焼鳥のくしを横から唾へてグレタ・ガルボは我事の様子に喜んだ。

「分つたよ。實に以外なんだ、大自然は實に頭がいいよ。」

「どうなんです。」

「まア、さうせかせるなよ。まだ肉はあるね。」

「肉はもうあまりありませんが、臓物の方はありますわ。」

「肉はまつい、臓物の方がいい。何しろ肉はすじばかりになつてるから。」

「さうですね。それから先生……」

「あゝ。では君に一つ質問するが、人間は物を食はなければ、性慾の方はどうなると思ふ。昂奮するか、それとも減退するか。」

「それは駄目になると思ひますわ。」

「何故。」

「でも、食物を食べなければ、精力がなくなるでせう。」

「そうは云へない。まづいものを食つて居る階級が子澤山だよ。」

「……」

「アメバーなどは食物がなくなると分裂する。つまり個體の生命の方が危険になると子を生むものだ。それでなくては種族が絶えてしまふだらう。」

「さうかも知れませんか。それで墓は？」

「其處さ。冬眠の末期になると、肝臓や腎臓が犠牲になつて、卵巣や睪丸が急に發達して來るんだよ。目方が急に増して來るのだ。然も春が近いから、生殖の準備と思へるが、實はさうでないのだ。勿論冬眠からさめると、卵巣や睪丸は發達するのは當然だが、春になるのでなく

あまり長く冬がつくと……つまり人工的に長く冬眠させて居ると、春にならなくとも生殖器が發達するのだ。實に面白いよ。」

河邊が持つ興味程にグレタ・ガルボは此事實に興味は持てなかつた。しきりに燒鳥を食つて居た。それを見た河邊が女の口許を指して云つた。

「その白い奴をよく味つて見給へ。」

女は夢中になつて食べて居た自分を一寸恥ぢてから、云はれた一片を食べ味つた。

「柔かくおいしうござんすわ。」

「さうだらう。それは何だか分るかね。」

「さうですね……分りませんわ。」

「分らんだらうな。それが今云つた卵巣よ。」

「卵巣？」

「あゝ、肝臓や腎臓を犠牲にして發達した卵巣なのだ、だからうまいのだ。」

「……」

河邊は血にのこつて居る臓物を竹ぐしでつゝいた。

「あゝ、これは罌丸だ。これを食べて見給へ。僕は墓がこんなふうまいと思はなかつたよ。」
もう其時グレタ・ガルボは蒼白になつて、ハンケチを口にあて、室をとび出しかけて居た。
河邊はクスノ、笑ひながら、又竹ぐしに墓の臓物をさして居た。

物理科 學教室

—

物理科とは變な名だ。道具の修理でもして居る教室と思ふだらう。もつとも甲府の驛近く萬年筆病院と云ふ立札があるし、高松の在には農具病院と云ふのがある。物理科は實は物理療法科の事なのだ。水治療法、温泉療法、ラヂウムエツキス光線等の様な、物理學的の治療を専門にする科なのだ。

だから針を飲み込みましたと云つてグレタ・ガルボがとび込んで來たのだ。云ふ迄もなく飲

み込んだ針のありかをエツキス光線で診断して貰ふためなのだ。

エツキス光線はくらやみの室にある。エツキス光線を通して居る時にも、室の中はボーツと青白い光がほのかに射すだけだ。

「古川先生はおいでになりませんか。」

醫局へグレタ・ガルボは狼狽してとび込んだのだ。

「古川は今レントゲンの第三室に居るよ。」

醫局に居た助手が皮肉さうな笑を見せた。

「さうですか。」

グレタ・ガルボは不安らしく立つた。

「近來しきりに古川を追ひ廻して居るぢやないか。」

「……」

場なれして居るグレタ・ガルボは唯笑ひ返した。

「古川は犬の頭を映して居るんだから、まだ一時間位は出て來ないよ。」

「さうですか。」

女は不安の表情をつとけて居る。

「どうしたのだ。古川とランデブーの約束でもしたのか。」

「そんな事ならいゝんですが……。」

「ぢやアどうしたのだ。」

「私あの一針をのんぢやつたんです。」

「針を……針をのむとは？分つたあんまりおしやべりをするので、外科で口を縫ふ手術でもしてもらつた拍子に、醫者が針を口の中に落したんだらう。」

「……」

グレタ・ガルボはまだ不安の表情を續けて居る。

「古川でなくてもいゝだらう。第一レントゲン室はあいてるよ。僕がみてやらうか。」

「ス、ス。」

「おや、おれではいやなのか、御挨拶だな。」

「さう云ふ譯でもありませんけど。」

實は針はうそなのだ。何故グレタ・ガルボはこんな見え透く……これこそほんとに見え透くうそだらう、何故つてエツキス光線で見られるんだから……うそをついたのだ。

グレタ・ガルボは計畫的にうそをついて居るのだ。醫者専門の「醫界ニツボン」でも記者は記者だ、探訪のためにはうそもつかなくてはならないのだ。醫學者の研究を早く探知するためには、色仕かけも敢てする程の、記者良心を持つ彼女なのだ、針を飲んだ位のうそは彼女にとつては朝飯前のうそなのだ。

古川が近來熱中して居る研究の内容を知るために、グレタ・ガルボは色仕かけを二月も續けてゐた。個人的には醫局の噂になる程の仲に迄なつて居る。だがどうしても古川は研究の内容を洩らしては呉れないのだ。

古川が毎日午後になつて使ふ第三レントゲン室は、鍵がかたくかけてある。古川はいつも犬をつれてそのレントゲン室へ入る。が古川の不用意に云つた言葉で想像すると、此犬は古川の研究とは全く關係のないもので、同様に迄研究の内容を秘密にするためのトリックに過ぎない。

と、グレタ・ガルボは知つて居るのだ。

針を飲んだと不安の表情でとび込んで来れば、いくら秘密主義の古川も、まんざら好きでない事もない女を、狼狽してエツキス光線室へ入るであらう、と女らしい考へだつたのだ。

「では又来ますわ。」と女は落膽した顔で醫局を出た。が彼女の足はそのまゝ第三レントゲン室へ向つて居た。どうせドアに鍵のかゝつて居るのはきまつて居ると、グレタ・ガルボはドアをコツ／＼と叩いた。返事もなくドアが中からあいた。女は一足とびに飛び込んでからハツとした。ドアから廊下の光は入つて居るが室内は殆んど何も見えない程の暗さだつた。いくら職業意識の目をみはつても、彼女の眼底には殆んど何も映らなかつた。彼女がもう一度室内を見廻した時には、古川がもう電燈のスイッチを捻つた後だつた。犬のかごはあつた。レントゲンの装置はあつた。が何物も古川の研究を探る材料はなかつた。

「何の用事？」

古川は笑ひかけて居る。

「針をうっかり飲み込みまして……」

と云ふより外に道がなかつた。

「針……いつ……」

「一時間程前です。」

そんな事はどうでもいゝ事なのだ。

「お忙しいのでせう。」

とさぐりを入れた。

「うっかり居眠りをしちやつた時に、急に叩かれてビックリしたよ。」

一向に効果のない返事だつた。

「もう二月も續けての御研究ですから、おつかれでせう。」

「あゝ疲れて来たよ。一向成績が出ないから尙更ら……」

「さうでせうね。でもいづれ大研究になつて御発表の日がありますわ。」

「いつの事だかなア……」

元氣のない返事だつた。それがグレタ・ガルボには研究の暴露を警戒する古川の内心と讀め